



文部科学省 「地（知）の拠点整備事業」平成25年度採択
新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点

平成26年度 地域交流活動報告書
地（知）の拠点整備事業 成果報告書

発行日 平成27年7月

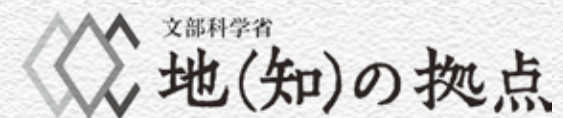
編集発行 杏林大学 地域交流推進室

〒192-8508 東京都八王子市宮下町476

TEL：042-691-8725 FAX：042-691-3809

<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/society/area2/>

印刷 (株)ナナオ企画 〒104-0033 東京都中央区新川12-9-9



2014
平成26年度

地域交流活動報告書

地(知)の拠点整備事業 成果報告書



地域交流活動報告書

目次

ごあいさつ	4
学 長 跡見 裕	4
地域交流推進室 室長 古本 泰之	5
地（知）の拠点整備事業に関する社会貢献活動	6
公開講演会・公開講座	8
健康分野での地域交流活動	9
障害者スポーツへの支援 課題と必要な支援を学ぶ	9
健康分野でのその他の主な地域交流活動	9
教育分野での地域交流活動	10
子どもの成長を支援する野外活動リーダーの育成	10
発達障がい児とその家族を対象とした野外活動支援 「きらめきハッピーキャンプ」を実施	10
小学校英語教育と中学校英語教育の スムーズな接続を目指して	11
教育分野でのその他の主な地域交流活動	11
地域活性化分野での地域交流活動	12
観光地における外国人の意識調査 —御岳山観光資源の英語による情報発信に向けて—	12
鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営	12
Discover “Hachioji Hamura Mitaka”	13
八王子市内での地域イベントの活性化活動を 通じた地域振興教育	13
秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との連携協定に 基づく活動に参加	14
地域活性化分野でのその他の主な地域交流活動	15

ごあいさつ



大学の多様な資源を活用し、 地域との連携を深めていく

学長 跡見 裕

杏林大学が進めている“地域との交流”は健康や教育などさまざまな分野に渡っております。これらの遂行に関しては、平成25年に設置した杏林CCRC研究所や地域交流委員会をはじめとした教職員の多大な努力はもとより、それにもまして地域の皆さまの教育・研究活動へのご協力が必要であります。常日頃から、協働していただいている地域関係者の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

私どもは、大学は地域との連携を深めてこそ、その存在意義が増すものと考えております。大学には多様な資源があります。専門性の高い教職員がおり、施設としても図書館や語学研修が可能な語学サロンなども整っています。これらの資源を活用し、より地域との連携を深めていくことが本学に課された使命の一つであり、地域における知の拠点として発展するのが本学の重要な任務であると考えます。

これまでの取り組みの成果が結実する形で、「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」というテーマで平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択され、東京都三鷹市・八王子市・羽村市の皆さまとの密接な連携をもとに、5か年間の活動を行うこととなりました。今回の事業は、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3分野を軸に、本学のこれま

での地域交流活動を、教育・研究・社会貢献の面において全学的に発展させていくものです。平成26年度は事業の2年目にあたり、連携3自治体との関係強化に加え、「研究」「教育」「社会貢献」の各分野におけるさまざまな地域志向活動が本格化して参りました。本報告書は、「地（知）の拠点整備事業」の成果報告を中心として、平成26年度における本学の地域交流活動の全体像をお示しするものとなっております。できるだけ多くの方にご覧いただき、本学の地域交流活動をご理解いただくとともに、積極的なご意見を本学にお寄せいただければ幸いです。

昭和41年に三鷹市新川に開設された杏林学園は平成28年に創立50周年を迎えます。それに合わせて、同年4月には保健学部・総合政策学部・外国語学部の3学部の拠点となっていた八王子キャンパスから、新たに三鷹市下連雀に建設中の井の頭キャンパスへの移転が予定されております。これらのことを契機に、本学は医学・保健医療系と人文・社会科学系を有する総合大学として、さらに地域との連携に力を入れて参りたいと考えております。なにとぞ本学の活動に引き続きのご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



連携自治体および関係者の皆さまの ご協力により活動が活性化

地域交流推進室 室長 古本 泰之

少子高齢化・グローバル化など急速かつ不断の状況変化に地域社会が直面している現在、その地域に関わりを持つ大学が果たす役割には、これまで以上に踏み込んだ内容が求められています。地域に対して大学がより真剣に向き合わなければならない時代を迎えているといえ、昨今ではさまざまなメディアにおいて地域と大学との関わり方について議論がなされています。

杏林大学では1970年の創立以来、主に医学部・保健学部・医学部付属病院による「健康」を軸とした教育・研究・社会貢献活動が東京都三鷹市・八王子市などを中心に積み重ねられてきました。総合政策学部・外国語学部の文系学部においても、主に八王子キャンパス周辺の東京都八王子市・羽村市を中心として、学部の特長を生かした多様な活動を行ってきました。また、本学は羽村市内にキャンパスを有しておりませんが、講演会活動の実施から徐々に活動の幅を広げ、2010年には包括連携協定を締結させていただき、キャンパスを持たない地域での大学の研究・教育資源の活用という新たな地域交流のあり方を模索して5年が経過しました。

それらの実績を通じて、2013年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に申請し、採択を受けました。この事業

は「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」を目指すという本学の立ち位置を明らかにするとともに、これまでの活動を統合発展させる重要な機会だと考えております。

2014年度の教育面での地域志向活動においては、全学での1年生を対象とした地域志向科目「地域と大学」の開講が最も大きい成果と言えます。この授業は、各学部において地域課題に取り組む際の基礎的な「作法」を学ぶためにさまざまな教育的工夫が取り入れられており、「地（知）の拠点整備事業」採択校らしい特徴ある科目になったと考えています。合わせて、地域住民の方々に対して開かれた学びの場として設定した「生きがいづくりコーディネーター」養成講座も3名の受講者を迎えることができました。社会貢献活動においても、4学部総計で21件の特徴ある活動を展開して参りました。これらの活動は、連携自治体を中心とする関係者の皆さまのご協力なくしては成立しなかったもので、心より御礼申し上げる次第です。

2016年の井の頭新キャンパス移転を契機に、本学の地域交流活動をさらに活性化して参りたいと考えております。本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見を本学にお寄せいただければ幸いです。

地(知)の拠点整備事業に関する社会貢献活動

平成26年度の「地(知)の拠点整備事業」における社会貢献活動は、「健康寿命延伸」「生きがい創出」「災害に備えるまちづくり」の3分野において、14件の活動を実施しました。活動の具体的な内容については、「詳細ページ」をご覧ください。

分類	活動名	担当者	活動場所	活動内容	詳細ページ
健康寿命延伸	「生涯スポーツの機会提供」プログラム	石井博之 保健学部 理学療法学科 准教授	八王子 キャンパス 羽村市	羽村市の住民に対して、運動能力評価を行い、体重管理や体力増強など運動目的に合わせたプログラムの提案やアドバイスをを行い、運動の継続や健康寿命の増進を図った。	28
	障害者（児）スポーツの理解向上と参加支援	芝原美由紀 保健学部 理学療法学科 准教授	八王子市	障害者（児）スポーツの理解向上のために、地域の普通小学校に在籍している子どもたちに、体験事業実施、情報提供、事後学習等を行った。	28
	八王子市平岡町わくわく健幸教室	榎本雪絵 保健学部 理学療法学科 准教授	八王子市 平岡町	八王子市平岡町在住の高齢者を対象に、定期的な健康に関する講義と体操を組み合わせたわくわく健幸教室を開催し、健康増進、健康教育を行った。	29
	八王子市におけるエイズ・ピア・エデュケーション	北島勉 総合政策学部 教授	八王子市	八王子市保健所と合同で行ってきたエイズ・ピア・エデュケーション及び中学生を対象とした健康教育活動をもとに、八王子市内でピア活動を行い、市内の若者にHIV/AIDSや健康に関する情報提供することを目的とする。八王子市内の高校を対象に、ピア活動の実施や高校生のピア活動への参加の可能性について調査した。	30
	学校定期健康診断の補助	大嶺智子 保健学部 健康福祉学科 教授	八王子市 国分寺市 国立市	学校を拠点としたヘルスプロモーションの健康戦略が浸透しつつある昨今、健康づくりが展開される学校保健活動活性化の一翼を担うべく、社会貢献活動として学校定期健康診断における補助依頼に対応した。	30
生きがい創出	子育て支援プログラム				
	1 妊娠期から生育期の多胎育児支援	太田ひろみ 保健学部 看護学科 教授	三鷹 キャンパス	1）多胎妊娠中の妊婦や家族が、医療・看護の専門職や多胎育児経験者と交流を持ち、不安や問題を解決する場を提供した。 2）多胎妊娠期から育児期の当事者に対して、同じ経験をしたピア（仲間）が、訪問し悩みや不安に寄り添う「ピアサポーターによる訪問活動」を実施した。 3）「訪問型支援」の意義を考慮したピアサポート活動を広めるため、「ピアサポーター養成講座」を開催した。 4）年に1度、多摩地域のふたごサークルメンバー交流会「ツインズマーケット」を行い、相互支援・相互教育をサポートした。	31

分類	活動名	担当者	活動場所	活動内容	詳細ページ
生きがい創出	2 極低出生体重児親の会「びあんず」における育児支援	吉野純 保健学部 看護学科 講師	三鷹 キャンパス	1800 g 未満で出生し、NICU/GCUを退院した子どもと家族を対象にする育児支援活動である。年に4回ほど、専門家による講習や相談を実施し、その間学生が子供を預かり遊びや授乳を行った。	32
	3 保護者が幼児に性教育を行うための支援	土屋有利子 保健学部 看護学科 准教授	三鷹市 八王子市 文京区	保護者が幼児に対して性教育を行うため、三鷹市、八王子市内の保育園に出向いて、4、5歳児とその保護者を対象にいのちの誕生やいのちの大切さについて話す「いのちのおはなし会」を実施した。	32
	住み慣れた地域で過ごすための「在宅・あぶりこツーカーチーム（仮称）」作り	大金ひろみ 保健学部 看護学科 准教授	三鷹市	病院と地域の専門職による連携活動を促進することを目的とし、退院支援の質の向上、関わった患者・家族の「その後」がわかる連携を目指す病院内外の組織として「在宅・あぶりこツーカーチーム（仮称）」のベースをつくる。	33
	羽村東口商店街ヒアリングプロジェクト	三浦秀之 総合政策学部 講師	羽村市 東口商店会	同一商圈に大型の新規開店が目前に迫っている羽村駅東口商店会（羽村駅東口エリア）を対象とし、高齢者や若者にとっての魅力ある商店街づくりを通じての社会貢献活動を実施する。	34
	音楽（吹奏楽）を活かした幼児及び障がい者・高齢者の生きがい創出活動	加藤英世 保健学部 作業療法学科 教授	八王子市	「とぶき育成園」など社会福祉施設・医療施設等の施設で過ごされている方々へ本学の合奏・合唱経験者の学生を中心に音楽による生きがい創出・発達支援を行う。	35
	「私の案内書作り」講座	兎澤恵子 保健学部 看護学科 教授	三鷹市 三鷹ネット ワーク大学	個別性の高い高齢者一人一人が、自分の人生の後半を自分らしく過ごすために、健康である間に高齢者自らが考える機会を用意しサポートした。	35
	子ども虐待防止シンポジウムの開催	楊國昌 医学部 教授	三鷹市	子ども虐待防止月間の11月に三鷹ネットワーク大学を会場に三鷹市を中心とした一般市民対象に虐待防止に向けた啓発活動としてシンポジウムを開催した。	36

(次ページに続く)

健康分野での地域交流活動

保健学部 基礎理学療法学研究室
障害者スポーツへの支援 課題と必要な支援を学ぶ

指導教員名 一場 友実 学生代表者 矢作 公佑

■ 概 要

- 第19回ハマピック大会サポート支援
(横浜市三ツ沢公園陸上競技場 平成26年5月6日、5月24日)
障害児車椅子陸上チーム「ラストラード」が参加する
陸上競技大会にてボランティアを行った。
- 肢体不自由者（児）のスポーツ参加支援
(国立リハビリテーションセンター 平成26年10月19日、
11月16日、12月13日 12月21日)
肢体切断、腕神経叢麻痺、脳卒中後遺症、Parkinson
病など身体に障害を持った方々によって構成される野球
チーム「埼玉ウィーズ」の練習および練習試合に参加。

■ ねらい

- 理学療法士としての障害者スポーツへのかかわり方を学ぶ。

- 障害者スポーツの支援を通じ、障害者選手が普段どのよ
うなことに不便を感じているか理解し、改善方法を考える。

■ 成 果

- ハマピック大会では、ボランティアを通じ協調性や努力
を続けることの大切さ、理学療法士として障害者選手の
モチベーションの維持と向上を支えケアすることの重要
性を学んだ。
- 障害者野球の練習や試合の補助をする中で、身体ケアや
義肢装具の管理方法などを学んだ。
- 理学療法士としての障害者スポーツへのかかわり方や選
手のケアの方法、指導者としての考え方などについても
学ぶことができ、将来に活かすことができる活動であつ
た。

健康分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載）

No.	行 事 名	実 施 期 間	活 動 主 体
1	羽村市の平日夜間急患センターへ医師派遣	通年	医学部
2	八王子市災害時支援ボランティア	通年	保健学部
3	第9回三鷹市民公開講座 腎臓について考えるフォーラム	5月	医学部付属病院
4	三鷹の森ジブリ美術館にて基礎救命処置（BLS）・応急手当講習会	5月	医学部付属病院
5	三鷹老人クラブ連合会への看護師派遣	5月、6月、9月、10月	医学部付属病院
6	三鷹キャンサーネット	5月、9月、12月	医学部
7	看護週間	6月	医学部付属病院
8	多摩多胎ネットによる多胎育児支援	7月～ 3月	保健学部・医学部付属病院
9	気仙沼市被災地支援活動	8月	医学部付属病院
10	杏林大学医学部付属病院と三鷹市老人クラブ連合会との合同行事	9月、2月	医学部付属病院
11	羽村市健康セミナー、はむら健康の日	1月、5月	保健学部
12	小平市民公開講座「嚥下障害診療の最前線」	2月	医学部
13	中野団地すみれの会	3月	総合政策学部
14	マタニティフェスティバルin武蔵野	3月	医学部付属病院



三鷹市の街頭で市民公開講座をPR



気仙沼市被災地支援活動の様子

公開講演会・公開講座



公開講演会の様子

地域の皆さまへの公開講演会・講座提供を八王子学園都市大学いちよう塾、三鷹キャンパス講堂、羽村市生涯学習センター「ゆとろぎ」などさまざまな会場で実施し、延べ1,768名の方が参加されました。大学側からの一方的な提供ではなく、地域の皆さまとの意見交換から内容を設定する講座も行っており、互いに学びあう機会をこれからも展開していきます。

下記一覧では平成26年度公開講演会26回開催されたうちの一部を抜粋して紹介します。今後も大学COC事業のコンセプトに基づいた本学ならではの有意義な内容を多数行いますので、気軽にご参加ください。予約不要です。

平成26年度公開講演会（一部掲載）

1	7/12（土） 14:00-15:30	地域で認知症をみる	医学部准教授 長谷川 浩	三鷹ネットワーク大学
2	9/27（土） 13:30-15:00	「ロコモ」を知っていますか？	医学部教授 市村 正一	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
3	10/25（土） 13:30-15:00	健康と運動	保健学部准教授 石井 博之	八王子学園都市センター
4	11/8（土） 13:30-15:00	応急処置 身の回りの危険	保健学部教授 和田 貴子	八王子学園都市センター
5	11/12（水） 18:00-19:30	新たに展開した薬疹の世界	医学部教授 塩原 哲夫	三鷹キャンパス
6	11/15（土） 13:30-15:00	これからの高齢者介護 誰がどのように担うべきか	総合政策学部准教授 岡村 裕	八王子学園都市センター
7	11/22（土） 14:00-15:30	ジブリ映画字幕翻訳から学ぶ 異文化間コミュニケーション	外国語学部准教授 八木橋 宏勇	三鷹ネットワーク大学

保健学部／外国語学部 子どもの成長を支援する野外活動リーダーの育成プロジェクトチーム

子どもの成長を支援する野外活動リーダーの育成

指導教員名 井手 拓郎 学生代表者 新飯田 ついり（外国語学部）

■ 概 要

- 野外活動参加が想定される子どもの特徴を踏まえ成長を支援する野外活動について、企画アイデアを検討した。
- 平成26年6月21日、長野県白樺湖エリアを活動地として想定し、企画アイデアの実効性を検証する視察活動を行った。

【白樺湖カヌースクール】 スクールの流れを確認しながら、ライフジャケットの装着チェック、カヌー乗り降り支援など子ども活動支援について検討した。

【白樺湖畔エリア】 飲み水となる湧水の位置、トイレの場所、危険個所などを確認。湖畔芝生エリアに限定すれば、危険性が低いことが判明した。

【姫木平】 「姫月平自然の家」各施設と散策路の安全を確認。スタッフから施設での水分補給や応急処置、危険生物などについて話を伺った。

- 視察後、野外活動の具体的な方法やリスク管理、意義について検討を行い、実際に白樺湖エリアで野外活動を行うと仮定して活動計画案を作成した。

■ ねらい

- 地域貢献のニーズに応えられるよう、野外活動について熟知し、その教育的意義や効果、リスク管理などを理解した野外活動リーダーを育成する。

■ 成 果

- 野外活動の実施計画の立て方について理解を深めた。
- 討論の過程で自ら積極的に意見を出すことを体験し、学生の主体性を醸成できた。
- 「野外活動による子どもの成長支援」という具体的なテーマに取り組む過程で、学生の地域に貢献する意欲を引き出すことにつながった。



フィールドワークの様子

保健学部／外国語学部

発達障がい児とその家族を対象とした野外活動支援「きらめきハッピーキャンプ」を実施

指導教員名 太田 ひろみ 分担者 朝野 聡／井手 拓郎／亀崎 路子／佐々木 裕子／楠田 美奈／太田 真理子／大屋 千鶴
学生代表者 篠崎 あいこ（保健学部）

■ 概 要

- 平成26年8月12日～13日、長野県姫木平にて、発達障がい児とその家族を対象とした野外活動支援を実施した。
- 学生は子どもと一緒に行動しながら、日常生活全般と遊びのサポート、レクリエーション企画・運営、親同士の交流会の参加などに携わった。

■ ねらい

- 子どもたちは自然の中で余暇を楽しみ、体験・交流を通して人間形成を促進する。
- ご家族は日常生活から離れリフレッシュし、日頃の悩みを他のご家族と共有する機会とする。

- 学生は発達障害のある子どもたちへの理解促進、専門知識や技術の定着、人間的成長をめざす。

■ 成 果

- 発達障害のある子どもたちは、様々な他者とのかわりから円滑な対人関係を形成する術を学習し、豊かな自然の中での体験から、自主性や自己効力感を獲得する機会となった。



ハッピーキャンプでの集合写真

外国語学部 英語学科英語教育コース

小学校英語教育と中学校英語教育のスムーズな接続を目指して

指導教員名 八木橋 宏勇 学生代表者 上村 ひかる

■ 概 要

- 平成26年6月～平成27年2月、「羽村市立第三中学校」と「羽村市学校適応指導教室ハーモニースクール・はむら」において、本学教職課程履修学生が英語授業に補助教員として参画し、生徒の学習支援（フィリピン人家庭と学校をつなぐタガログ語通訳も含む）を行った。
- 学生は、「教育フォーラム」（2014年12月23日 於東京都立岩倉高等学校）や「東京都教育委員会研究開発委員会指導資料説明会」（2015年2月9日 於品川区立荏原第六中学校）に出席し、効果的な英語授業の実践報告等を学ぶ機会を得た。

■ ねらい

- より実践的な小学校英語から、文法項目が複雑化する中学校英語へのスムーズな接続をめざす。
- 英語が得意な生徒と苦手な生徒が混在する一斉授業にお

いて、一人の教員では苦手生徒へのフォローが難しいため、補助教員として参画する。

■ 成 果

- 本事業で購入した英語教育関係教材を活用することで、事前に指導法等をリハーサルすることができ、有意義な現場経験を積むことができた。
- 教科指導・生徒指導における様々な課題、対処法、教員としての範の示し方等、教育現場に身を置いたことで得られた教訓も多かった。
- 本事業の遂行を通して、羽村市の中学生により細やかな英語指導を提供することができた。



学生による英語指導の様子

教育分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載）

No.	行 事 名	実 施 期 間	活 動 主 体
1	男女共同参画推進事業（羽村市）	通年	外国語学部
2	大学コンソーシアム八王子単位互換制度へ科目提供	通年	総合政策学部・外国語学部
3	羽村市養護教育等、英語教育スクールインターンシップ、ボランティア	5月～ 3月	保健学部・外国語学部
4	八王子市立宮上中学校学校運営協議会	4月～ 3月	総合政策学部
5	杏林大学医学部付属病院虐待防止委員会勉強会	5月、6月、10月、2月	医学部付属病院
6	羽村市児童館、保育園等職員向け研修	6月	保健学部
7	僻地診療所での見学実習	7月	医学部付属病院
8	中学生と保護者への「いのち」の教育	7月～ 8月	保健学部
9	がん看護研修会	7月～ 1月	医学部付属病院
10	夏！体験ボランティア2014inみたか	8月	医学部付属病院
11	地域教育シンポジウム（羽村市）	1月	保健学部・総合政策学部・外国語学部
12	ひよどり山中中学校学生の職場体験実施	3月	八王子キャンパス



ひよどり山中職場体験の様子



地域活性化分野での地域交流活動

外国語学部 観光地英語化プロジェクトチーム

観光地における外国人の意識調査

— 御岳山観光資源の英語による情報発信に向けて —

指導教員名 岩本 和良 学生代表者 本岡 英恵

■ 概 要

- 御岳山に登山を目的として来る外国人を集客する英語のホームページを作成した。
- 外国人観光客がインターネット検索をする際、当ホームページが上位にリストアップされるようキーワードを設定した。
- 既存の日本語と英語の情報を分析。提供したいモノやサービスに読み手を直接的に結びつけるため、“you”を主語とし読み手の視点から文章を作成した。
- 平成26年11月～平成27年3月に現地視察し情報を収集。とくに御岳山の主要な観光資源である武蔵御嶽神社の伝説に注目し、日本文化を知らない外国人でもイメージできるように紙芝居形式のコンテンツを制作した。

■ ねらい

- 日本から英語で行われる情報発信には、一方的なものが多い。当プロジェクトでは、受け手を意識し目的に合った文章をより自然な英語で発信する。

- 地域に貢献できる活動として、御岳山に登山を目的として来る外国人を集客する英語のホームページを作成する。

■ 成 果

- 今後、英文の修正や画像や動画の追加作業が必要だが、現状のホームページと方向性についてみたけ山観光協会の方に評価していただいた。
- 読み手や聞き手、目的に合わせたコミュニケーションの重要性について理解を深め、その難しさを実際に経験することができた。



御岳山での現地視察の様子

外国語学部 宇佐美ゼミナール

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営

指導教員名 宇佐美 貴浩 学生代表者 福家 拓弥

■ 概 要



御焚き上げの様子

- 平成26年11月8日、宇佐美ゼミナール3年生18名が、「鎌倉浄智寺写真供養感謝祭」に参加。これは、一人一人の人生を語る思い出深い写真に感謝の気持ちを込め供養することによって、新しい人生へと歩みだす手助けをす

る取り組みである。

- 鎌倉瑞泉寺で17年間続いてきたが、平成26年より北鎌倉浄智寺に場所を移して新しく開催。当ゼミナールは、企業への協賛依頼、現地自治体との調整、ポスターやSNSによる広報活動、および当日のイベント参加者の対応など企画・運営全般を実施した。

■ ねらい

- 毎年11月第2土曜日に開催し、数年後には鎌倉の観光イベントとし定着させ、地域活性化を促進する。
- 東日本大震災における持ち主不明の写真を御焚き上げすることにより、復興のお手伝いをする。
- 地域振興に関するプロジェクトの実現過程を体験し、地

域の人と文化と産業が共生することの大切さを学ぶ。

■ 成 果

- 約100名の参加者が、自然あふれる浄智寺の境内で写真の御焚き上げを体験し、こころ豊かな時間を共有することができた。
- 地域振興プロジェクトを成功させる知識と技術を身に着

け、地域の人・文化・産業の密接な協力関係の必要性を学んだ。

- 杏林大学外国語学部観光交流文化学科の存在を知らしめ、地域活性化に関する活動に貢献していることをPRできた。
- 現場での学びや地域自治体・企業、地域の人々との交流は、学生には貴重な体験となった。

外国語学部 坂本ゼミナール

Discover “Hachioji Hamura Mitaka”

指導教員名 坂本 ロビン 学生代表者 海上 崇／内山 苑子／平井 雄也

■ 概 要

- 平成26年7月および11月、八王子市、羽村市、三鷹市をグループごとに訪れ、外国人観光客に向けた情報提供について調査を行った。

【八王子市】

高尾山と「高尾山トリックアート美術館」を訪問。高尾山では外国人観光客に道案内の標識に英語がないことを指摘された。トリックアート美術館では英語での館内説明や解説がなされていた。

【羽村市】

羽村市役所で外国人向けのパンフレットを確認。羽村市主催のスタンプラリーに参加し、市内の観光資源になりそうなポイントをチェックした。また、「羽村市動物公園」に海外からの留学生を英語で案内し、満足度を確認した。

【三鷹市】

「三鷹の森ジブリ美術館」はジブリ仕様の大人から子供まで楽しめる施設だが、殆ど標識がなくガイドブック等は配布されていない。「井の頭自然文化園」は、パンフレットや施設内マップ等の大半が日本語表記であった。

■ ねらい

- 外国人観光客に三市の魅力を伝えるためどのようなこと

をすれば良いか、調査・考察する。

- 外国人観光客が満足する街づくりのため、どのような情報提供が必要か調査活動を行う。

■ 成 果

- 平成27年1月、英語同時通訳で発表会を行った。
- 外国人観光客に対し日本語に英語を併記したガイドブックやホームページの作成、英語表記がない場所に英語表記をつけるなどの改善点を提示。三鷹市担当グループはガイドブックを作成中である。今後、三市へ改善案を提案する。



調査活動の様子

外国語学部 古本泰之ゼミナール

八王子市内での地域イベントの活性化活動を通じた地域振興教育

指導教員名 古本 泰之 学生代表者 長谷部 智洋

■ 概 要

- 平成26年10月10日～12日、八王子市横山町周辺「ユーロード」で行われた「第11回八王子古本まつり」を地域振

興教育の対象とした。

- 事前に、観光交流文化学科5セメスター在籍の長谷部智洋・伊藤航平の2名と古本が茨城県大洗町を訪れ「文化系地域振興イベント」に参加調査し、「八王子古本まつり」

り」企画・運営への提案に反映させた。

- 複数回開催された「八王子古本まつり実行委員会」に出席し、「来場者アンケートの設計、休憩マップの作成、当日抽選会場ブースの企画について検討を行った。
- ゼミナール3年生全員が当日の運営に参加。アンケート配付・回収、マップ配付、ブース運営を行った。
- アンケート結果に合わせて、八王子古本まつりの発展に向けた提案を実行委員会の場において行った。

■ねらい

- 運営団体である「八王子古本まつり実行委員会」と共同でイベント活性化に取り組むことを通じて、地域振興に関する学びを現場で深める。



古本まつり会場の様子

■成 果

- イベント実施の初期段階から事後までの流れを実体験し、大学におけるイベント・コンベンションに関する学びの実効化につながった。
- ユーロードの古書店を中心とする「八王子古本まつり実行委員会」の各メンバーからは、イベント運営に学生という「若者の視点」が取り入れ可能となった点で高い評価をいただいた。



抽選会場ブースの様子

地域活性化分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載）

No.	行 事 名	実 施 期 間	活 動 主 体
1	図書館一般開放	通年	図書館
2	大学コンソーシアム八王子 フェアトレードカフェ MARCHE運営補助	通年	八王子キャンパス
3	八王子市災害時支援ボランティア	通年	保健学部
4	日野市の子育て支援関連行事参加	通年	保健学部
5	滝山城跡桜まつり 課外活動の発表（ダンス部）	4月	八王子キャンパス
6	三鷹・武蔵野地区リハビリテーション連絡会 合同研修会	6月	保健学部
7	八王子市宮下町民交流杏ジャムづくり	6月	八王子キャンパス
8	羽村市第3回環境フェスティバル学生参加	6月	外国語学部
9	多摩地区中学野球大会運営補助	7月	八王子キャンパス
10	観光関連事業インターンシップ（羽村動物公園・はむら夏まつり）	7月・8月	外国語学部
11	武蔵野・三鷹・小金井市 看護責任者および地域医療支援会議 意見交換会	7月、10月、1月、3月	医学部付属病院
12	八王子まつり山車の曳き子	8月	外国語学部
13	日野市児童館のキャンプ場ボランティア活動	8月	保健学部
14	周産期医療・母子保健関係者連絡会	8月、1月	医学部付属病院
15	三鷹市立東台小学校にて子どもと交換留学生「手打ちうどん」作り交流	11月	外国語学部
16	「三鷹まち歩き」三鷹市内マップ作りへ協力	11月	総合政策学部・外国語学部
17	はむら若者フォーラム実行委員、「未来フェス」などへの参加	11月	総合政策学部
18	八王子市消防署ファイヤーフェスティバル運営補助	11月	八王子キャンパス
19	羽村市産業祭、明るい選挙啓発ポスター展参加	11月	総合政策学部・外国語学部
20	日野冬フェスタ2014 イルミネーション出展	12月	八王子キャンパス
21	大学コンソーシアム 第6回学生研究発表会・市長ふれあいトーク参加	12月	保健学部・総合政策学部
22	羽村にぎわい音楽祭へ実行委員として参加	12月	総合政策学部・外国語学部
23	神奈川県箱根地域にて地域ハンドブックを使用したヒアリング調査実施	2月	総合政策学部・外国語学部



「はむら未来フェス」の様子



多摩地区中学野球大会での運営補助の様子



箱根地域でのヒアリング調査の様子

外国語学部

秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との連携協定に基づく活動に参加

指導教員名 井手 拓郎

■概 要

- 秋田県湯沢市の「秋の宮温泉郷イメージアップ推進協議会」と本学は、「まちづくり・観光事業に関する連携協定」を締結している。この協定にもとづく連携事業の一つとして、平成27年2月5日～9日、秋の宮温泉郷に、外国語学部観光交流文化学科の学生12名がフィールドスタディ履修生として赴き、「第17回かだる雪まつり」へ参加した。本学学生の参加は、今回で7回目となる。
- 例年同様、秋の宮温泉郷の皆さまは本学学生を暖かく迎え入れてくださり、同市の県立雄勝高等学校の学生や県内外からの家族連れも交えた貴重な交流となった。
- 学生は、雪まつりの会場づくりから当日の実施運営、片づけまでをスタッフとして関わり、無事に約3,000個のミニかまくらに明かりを灯し、会場を盛り上げることができた。

■ねらい

- 秋の宮温泉郷との連携を推し進め、イベントの運営支援に携わりながら、交流を図ることにより、地域と本学の双方が、お互いを高め合う関係を続けていく。

■成 果

- 秋の宮温泉郷地域にとっては、今回を含め、これまで継続してきた本学との連携事業を通じて、地元価値の再評価を促す機会の一つとなっている。
- 学生にとっては、キャンパスとは違う現場での学びや、地域住民・高校生・自治体・観光団体の方々との交流は、コミュニケーション力や問題発見・解決力の向上、また、新しいことへチャレンジする勇気を養うことができた。



ミニかまくら作りの様子

「地（知）の拠点整備事業」成果報告書

目次

ごあいさつ	18
八王子市長 石森 孝志 羽村市長 並木 心 三鷹市長 清原 慶子	
事業概要／事業実績	19
地（知）の拠点整備事業 平成26年度実績報告概要	19
平成26年度 杏林CCRC拠点推進委員会 開催記録	22
補助事業 成果報告	23
杏林CCRC研究所活動について	
大学が持つ知的資源をより広く地域住民へ還元	23
杏林CCRC研究所 所長 蒲生 忍	
研 究	
1 研 究①	24
杏林CCRC研究所セミナー報告	
2 研 究②	26
地域志向教育研究費について	
教 育	
3 教 育①	27
「地域と大学」講義 今年度より全学１年次必修科目としてスタート	
社会貢献活動	
4 社会貢献活動 健康寿命延伸①	28
「生涯スポーツの機会提供」プログラム	
5 社会貢献活動 健康寿命延伸②	28
障害者（児）スポーツの理解向上と参加支援	
6 社会貢献活動 健康寿命延伸③	29
八王子市平岡町 わくわく健幸教室	
7 社会貢献活動 健康寿命延伸④	30
八王子市におけるエイズ・ピア・エデュケーション	
8 社会貢献活動 健康寿命延伸⑤	30
学校定期健康診断の補助	

9 社会貢献活動 生きがい創出①	31
子育て支援プログラム	
10 社会貢献活動 生きがい創出②	33
住み慣れた地域で過ごすための 「在宅・あぷりこサッカーチーム（仮称）」作り	
11 社会貢献活動 生きがい創出③	34
羽村東口商店街 ヒアリングプロジェクト	
12 社会貢献活動 生きがい創出④	35
音楽（吹奏楽）を活かした幼児及び障がい者・高齢者の 生きがい創出活動	
13 社会貢献活動 生きがい創出⑤	35
「私の案内書作り」講座	
14 社会貢献活動 生きがい創出⑥	36
子ども虐待防止シンポジウムの開催	
15 社会貢献活動 災害に備えるまちづくり	37
防災ふれあいフェア等防災プログラム	
地域・大学間コーディネーターの活動	
COC事業を推進して ～種まきから芽生えの時期へ～	39
地域・大学間コーディネーター 井上 晶子	
全 体	
16 全 体①	40
第2回 杏林CCRCラウンドテーブル・ 第3回 杏林CCRCフォーラムを開催	
17 全 体②	41
「地域志向活動、どのように取り組むか？」 COC関連FD/SDワークショップを開催	
18 全 体③	41
杏林大学 地（知）の拠点整備事業 平成25年度事業に係る第三者評価報告書	
出張報告	
海外学術調査報告	43
米国カリフォルニア州の日系米人及び在米邦人社会の 高齢者施設調査	
国 内①	44
近畿地方のCOC事業採択校を訪問調査	
国 内②	45
「地（知）の拠点整備事業シンポジウム」に参加	
新聞等による「地（知）の拠点整備事業」に関する紹介	46



八王子市長
石森 孝志

活力ある地域創生につながる
取り組みに期待

平成25年度から5年間にわたり、地域貢献を柱として実施される、地（知）の拠点整備事業を通じて、杏林大学が八王子市及び三鷹市、羽村市との連携を中心に、全学的に地域に目を向けた取り組みを進められていることに、深く敬意を表します。

八王子市においても、高齢者の健康増進のための「健幸教室」や市民を対象とした「防災ふれあいフェア」の開催など様々な取り組みが行われ、全学をあげて地域課題に取り組む杏林大学の姿勢は、地域の方々からの評価も高く、市としても取り組みの一つひとつに感謝いたしております。

今後も、高齢化社会や災害対策などの地域課題について、八王子市及び三鷹市、羽村市との情報交換や連携を深めながら、活力ある地域創生につながる杏林大学の取り組みに期待しております。



羽村市長
並木 心

地域における「地(知)の拠点」として
今後も更なる発展を期待

羽村市との連携事業について、杏林大学跡見学長を始め、関係者の皆様にご尽力を賜わり、心より感謝申し上げます。

平成26年度は、杏林大学が「地（知）の拠点整備事業」で掲げた三本の柱に沿って、杏林大学の教員並びに学生の皆様に、直接羽村市まで足を運んでいただく中で、市事業の企画・運営への協力や、市民・事業者との交流、市の施策に関する提案などを通じ、杏林大学が持つ幅広い知的財産と学生の発想・行動力を享受させていただきました。

羽村市の行政運営において、年を追うごとに、杏林大学の力が欠かすことのできないものとなっていると強く感じております。

羽村市といたしましては、今後も、杏林大学との連携事業が強力に推進されることに期待し、「地（知）の拠点整備事業」に全力で取り組んでいくとともに、貴学が地域における「地（知）の拠点」として、更にご発展されますことをご祈念申し上げます。



三鷹市長
清原 慶子

キャンパス移転に向け、
さらなる地(知)の拠点の推進を

平成26年度は、「地（知）の拠点整備事業」の2年目として、三鷹をフィールドとした地域志向型授業や杏林大学の教員及び学生の皆さまとの協働事業が分野を超えて深化した年となりました。

現在、平成28年4月の「井の頭キャンパス」の開設を控えて、さらなる連携の方向性について調査・研究しています。杏林大学の地域志向型の活動と三鷹市の市民・団体等との「協働」の取り組みが相乗効果をもって、真に「地（知）の拠点」化が進むことを期待しています。

事業の実績	事業に係る具体的な成果
(1) 4月 3自治体との協力に基づく「地域と大学」科目の開講 ※詳細はP27参照	
(2) 4月 4学部科目の「地域志向」強化開始（地域関係者の講師招聘など） 総合政策学部や外国語学部、ゼミナールなどの地域志向化を引き続き行うとともに、既存科目の内容を再検討し、地域志向科目を平成25年度の55科目から75科目に増加させ、延べ5,373名が履修した。また、このうち9科目では地域関係者を講師として招聘した。	行政学について学ぶ学生が高齢化に直面した商店街の活性化プロジェクトに参加したり、日本語教育を学ぶ学生が市民対象の日本語講座を担当したりするなど、教育的効果を企図した社会貢献活動に学生たちが積極的に参加する場を増やすことで、現場での体験を通じた学びの実効化を進めた。
(3) 4月～ 3月 地域志向教育研究経費の交付、活動の開始 ※詳細はP26参照	
(4) 4月～ 3月 平成25年度の検討に基づく研究活動の実施 平成25年度中に杏林CCRC研究所が行った杏林CCRC研究所セミナー、公開講演会、杏林コモンズ、視察活動等の成果を踏まえ、平成26年度における本学の地域志向研究テーマの設定が複数行われた。	本補助事業の平成25年度の実施成果が、平成26年度の新たな研究活動につながっており、本補助事業の成果は着実に積み重なってきているといえる。 また、これらの研究活動は学部の壁を越え（平成26年度は医学部・保健学部による連携）、「杏林CCRC構想」をテーマとした学際的研究という本学にとって新たな取組となっており、杏林CCRC研究所による新たな研究活動の企画における成果といえる。
(5) 4月～ 3月 研究会開催（以降月例で開催）による地域志向研究 ※詳細はP 9 -P45参照	
(6) 8月～ 9月 英国・和歌山市等近畿地方の国内外先進地域での現地調査開始 ※詳細はP43-P45参照	
(7) 2月～ 3月 平成27年度の研究活動内容を杏林CCRCラウンドテーブル・杏林コモンズでの議論を基に立案 杏林コモンズ活動の場と位置づけている公開講演会のこれまでの成果と今後の方向性について話し合う会議を、杏林CCRC研究所、広報・企画調査室、地域交流課により平成26年4月22日以降5回開催した。議論を重ね、より学びを深めることができる連続講座の提供（生涯スポーツの普及活動など）を立案した。	この動きは、公開講演会の場を一方的な情報発信に終わらない地域住民と大学とが協働できる生涯学習組織へと発展させていくと同時に、杏林コモンズで得られた新たな視座を杏林CCRC研究所を中心とした新たな研究へとつなげ、それを公開講演会にて還元していくという循環を意図した新たな動きであり、本補助事業の採択がもたらした成果であるといえる。
(8) 3月 杏林CCRC研究所紀要発刊 平成26年の研究所・地域志向教育研究の成果を広く公開するため、「平成26年度杏林大学杏林CCRC研究所紀要」を、平成27年3月20日に発行。本紀要所収の各文献は、いずれも「杏林CCRC構想」が目指す都市型高齢社会の問題点とその中での大学の果たすべき役割について考察するものであり、本補助事業における地域志向研究の成果を論文形式で学外に公表したものである。	紀要の作成を通じて、本補助事業における「杏林CCRC構想」が取り組むべき新たな課題が発見されたことから、次年度以降の杏林CCRC研究所を中心とした地域志向教育研究活動のテーマとして取り上げていく。
(9) 4月～ 3月 「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に係る各既往プロジェクトの実施 ※詳細はP28-P38参照	

事業の実績	事業に係る具体的な成果
(10) 4月～ 3月 杏林CCRCラウンドテーブル・杏林コモンズの成果を参考に上記テーマに基づいた新規プロジェクトの企画・実施	新規プロジェクトとして企画・実施したものは次の通り。 外国語学部・高木眞佐子教授による羽村市発行のパンフレット類翻訳事業や総合政策学部・木暮健太郎准教授による若者フォーラムの活動、外国語学部・井手拓郎准教授他による地域活性化を目指した杏林コモンズ活動の実施、総合政策学部・進邦徹夫教授による復興支援活動グループへのワークショップを開催した。また杏林コモンズにおける住民からの意見を受け、外国語学部・嵐洋子准教授による外国籍住民への日本語学習支援を実施した。三鷹市においても保健学部・兎澤恵子教授による高齢者の生活の質向上に向けたシナリオ作り講座を開催した。 本事業のテーマに基づき、外国籍住民に対し災害時や健康に関する地域の情報が的確に提供出来るようにするための翻訳事業では、翻訳作業に関わった学生の就業に対する理解が進んだことが確認できた。高齢社会を活気あるものにするため、ワールドカフェ方式で多様な世代が触れ合う場を設ける若者フォーラムの取り組みは、若者の関心を市政へ向けるための機会とするため延べ30人の学生が携わり、市民間の交流が進むとともに学生のコミュニケーション能力の向上が図られた。地域活性化を目指した杏林コモンズ活動には延べ50人の学生が協力し、地域課題を住民とともに考え学ぶ貴重な機会となった。杏林コモンズの場における住民からの意見を受けてスタートした外国籍住民の日本語学習の支援においては、日本語学習に対する学生の意識・能力の向上が図られた。
(11) 4月～ 3月 公開講演会の内容を本事業の趣旨に基づいた形で拡充し、連携自治体において実施	本学広報・企画調査室、杏林CCRC研究所、地域交流課との共同で、連携自治体である三鷹市、羽村市、八王子市で合計26回、本補助事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に関する公開講演会を行った。 平成28年度の三鷹市井の頭キャンパスへの移転を踏まえ、今後の活動について見直す観点から、公開講演会の会場はアクセスが便利な三鷹ネットワーク大学を中心に開講し、大学の知的資源を積極的に提供した。
(12) 9月～ 3月 生きがいづくりコーディネーター認定に係るウェルネス科目群の一部実施	保健学部・総合政策学部・外国語学部で八王子キャンパスにて開講している科目のうち、本補助事業のテーマのひとつである「健康寿命延伸」を軸に、それに関連した講義・演習科目を組み合わせ、市民・学生を対象とした教育プログラムである「生きがいづくりコーディネーター」養成プログラムを、平成26年秋季学期より開講した。 修了者には今後本学の教育（授業での講演など）・社会貢献活動（健康寿命延伸の取組）に関わっていただくことを予定しており、地域と大学とのより密接な連携関係の構築に加え、学生の学びの充実を図る準備が整った。
(13) 12月～ 3月 平成27年度からのウェルネス科目群本格実施に向けた検討、杏林ラウンドテーブル等におけるテーマ調査	平成27年度は、文部科学省「履修証明制度」を前提に「生きがい創出」「災害に備えるまちづくり」の2カテゴリーで「生きがいづくりコーディネーター」養成プログラムを実施することを予定しており、すでに募集を実施した。その上で、平成27年2月21日に開催した第2回杏林CCRCラウンドテーブルにおいて、地域関係者にとって有益な科目の検討や調査を実施した。 このプログラムは、運用およびテーマについて本学のみならず連携自治体との継続的な検討を行ってきた成果である。特に平成28年度に井の頭キャンパスの設置を予定している三鷹市からは、平成26年度杏林CCRCラウンドテーブルの場において、今後もプログラムの発展に積極的な関与をしていきたいとの発言があり、さらなる地域の課題に寄り添ったプログラムの構築が期待される。
(14) 4月～ 3月 平成28年度の三鷹市への教育・研究機能集約に伴う体制づくり	平成26年6月13日に三鷹市と本学との連携に関する包括的な連絡会を実施し、そのなかで本補助事業に関する各種の取組について事業計画として確認を行った。それ以外にも継続的に三鷹市役所と本学の移転後の教育・研究機能の集約について、地域交流推進室・地域・大学間コーディネーター・地域交流課と三鷹市役所企画経営課との協議を行っている。 これらの活動を通じて、キャンパスの移転によって教育・研究の地域志向化に切れ目が生じないようにするための準備体制を構築した。また、平成27年度については平成28年度の三鷹市井の頭キャンパスへの移転をふまえ、これまで以上に八王子キャンパス3学部（保健学部・総合政策学部・外国語学部）の三鷹市における教育・研究活動が増加することとなる。
(15) 4月～ 3月 CCRC拠点推進委員会の月例開催、3市と具体的連携協議	本補助事業の最高意思決定機関である杏林CCRC拠点推進委員会（委員長：学長）は、平成26年4月7日に第1回を開催し、以降、平成26年度中に7回の会議を行い、人事・活動計画などについての審議を行い、進捗状態の管理を行った。 連携自治体3市とは日常的に密接な連絡関係を取っており、それらの中から、自治体関係者への新たな障がい者スポーツの情報提供（三鷹市）、市内のさまざまな表記や発行物の多言語化（羽村市）など、新たな地域志向活動が創出されている。

事業の実績	事業に係る具体的な成果
(16) 4月～ 3月 本事業内容の学内外での周知徹底（FD・SD講演会の実施時期検討）、ウェブサイトでの事業情報公開（随時発信）	本事業の学内外での周知徹底を行うため、以下の活動を行った。 ①事業成果報告書・地域交流活動報告書・杏林大学杏林CCRC研究所紀要の発行・配付 ②地域活動ハンドブックの作成 ③全学FD・SDワークショップの実施 ④ウェブサイトでは、「最新ニュース」欄では地域貢献活動やシンポジウム等への参加報告等を掲載し、事業の進捗状態を報告した。また「イベント」欄では「フォーラム」や「研究所セミナー」、「講演会」等に関する予告と報告他を掲載したことにより、市民や本学の取組に興味を持つ方々からの問合せを受けた。特設サイトへのアクセス数は開設以来平成27年3月末までは約9,366件、一日平均アクセス数は約30件弱であった。 実績①～④についての成果を以下にまとめる。 ①本補助事業の成果をさまざまな角度から紹介することが可能となり、その配付を通じて、学内外において本学の取組の趣旨・成果についての周知徹底を図ることができた。 ②ハンドブックの現場利用を想定した合宿を平成27年2月15～16日に行い、具体的な地域活動の取組に使用した。参加学生26名の地域課題解決力の向上に資するとともに、次年度以降の本格利用の準備が整った。 ③・④本補助事業の趣旨である「地域のための大学」についての周知徹底及び教育・研究・社会貢献活動の情報共有を通じて、教職員の意識改善が進んだ。 特に全学FD・SDワークショップでは、職位に関係なくグループディスカッションした内容に対する高評価が得られた。
(17) 4月 本事業に関する各種アンケートの実施	文部科学省からの指示設問に独自設問を加えた平成25年度本補助事業の取組に関するアンケートを作成し、平成26年3月～5月にかけて本学の全学生・全教職員（看護職、技術職を除く）・連携自治体の責任者に対して実施した。学生の回収率は74.8%、教職員の回収率は60.9%、自治体の回収率は100%であった。 学生に対するアンケートでは、地域志向科目の受講者の「主体的判断力・行動力」「地域貢献への理解度」「課題解決力」に関しての自己肯定感の高まりが約60%見られた一方で、同科目の受講率や本補助事業の認知度の向上において障害となっている部分に関して把握ができ、今後の取組の方向性を明らかにすることができた。
(18) 4月～ 3月 杏林コモンズの運用	市民との意見交換による地域課題吸い上げの場として設定した杏林コモンズは、平成26年度に連携する三鷹市、八王子市、羽村市の3自治体において設置が完了した。本学の活動を紹介するとともに公開講演会を通じて市民の声を聞く機会を設けた。 連携3自治体において杏林コモンズの設置が完了し、本学の活動を紹介するとともに、公開講演会、杏林CCRC研究所セミナー、まちづくりに関する意見交換会（羽村市）などの場を通じて市民との意見交換を行い、本補助事業を進めていく上での有益な意見が得られた。
(19) 4月～ 6月 事業年次報告書および地域交流活動報告書の作成	平成26年7月に本学の教育・社会貢献活動を広く社会に公開することを目的として「地域交流活動報告書」を発行。また、本事業の平成25年度の取組成果を取りまとめた「成果報告書」を平成26年8月に発行した。 本補助事業の成果をさまざまな角度から紹介することが可能となり、その配付を通じて、学内外において本学の取組の趣旨・成果についての周知徹底を図ることができた。
(20) 5月 CCRC拠点推進委員会による内部評価の実施、外部有識者からなる第三者評価機関の設置、点検・改善を実施	杏林CCRC拠点推進委員会は、平成27年度中に計8回の会議を開催、事業計画を元に、人事、活動計画、進捗状況等の確認・管理を通じて内部評価を行った。また、第三者評価委員会を開催し、平成25年度の事業成果について点検・評価を受審した。評価内容については報告書にまとめ、平成26年9月25日に発行、平成26年10月22日にウェブサイトに公表した。 杏林CCRC拠点推進委員会の定期的な開催を通じて、事業の全学的な理解が進み、進捗状況に大きな遅れが生じることのない円滑な事業推進へとつながった。第三者評価委員会では、本学の迅速な取組に対する評価をいただくとともに、自発的な教職員の活動が進む仕組み作り、市民への本補助事業の周知方策、都市型高齢社会における現代的な課題など、今後の活動を行う上での貴重なご提案をいただき、今後の事業推進に役立てることができた。
(21) 11月 杏林CCRCラウンドテーブル開催 ※詳細はP40参照	
(22) 2月～ 3月 第3回杏林CCRCフォーラム（八王子市）の開催 ※詳細はP40参照	

平成26年度

杏林CCRC拠点推進委員会 開催記録

回	日 程	場 所	議 題	
第 1 回	4 月 7 日	本部棟 6 階	- 平成25年度COC実績報告書の作成・提出に伴う担当について - 平成26年度CCRC事業工程表について - 地域志向教育研究費選考について	- 地域活動助成費選考について - PBL教室について - 地（知）の拠点整備事業アンケートについて
第 2 回	5 月10日		- 公開講演会について（5 /10（土）ご報告、公開講演会予定一覧） - 平成25年度大学改革推進等補助金（COC）実績報告書について - 地域活動助成費による消耗品の購入について	- 地域活動助成費選考について（榎本先生） - 子育て支援、生涯スポーツ機会提供、救命救助法講習の予算について - 第三者評価機関委員の選出について
第 3 回	7 月14日		- 公開講演会について（4 件） - 生きがいづくりコーディネーター養成プログラムについて - 予算執行状況について - 事業進捗状況について - 地域活動助成費の予算枠について	- 地（知）の拠点整備事業に係る謝礼金基準改正について - 地域活動助成費申請書の改正について - 地域活動助成費選考について（4 件） - 第三者評価委員会について - 国内出張について
第 4 回	9 月22日		- 公開講演会について（3 件） - 生きがいづくりコーディネーター履修生について - 予算執行状況について - 工程状況について - 国内他大学調査について - 第三者評価の実施報告について（9 / 5）	- 杏林コモンズについて（羽村・八王子） - 杏林CCRCフォーラム・ラウンドテーブルについて（八王子学園都市センターにて） - 地域活動助成費の申請について（保健学部 加藤英世教授） - 防災ふれあいフェアについて - 次年度予算編成に伴う教員への調査について
第 5 回	11月17日		- 公開講演会について（10件） - 予算執行状況について - 工程状況について - FSDSワークショップアンケートについて - 生きがいづくりコーディネーター実施要領について（案）	- 地域活動助成費について（保健学部 兎澤先生） - 海外出張申請について（CCRC研究所 蒲生所長） 「杏林CCRC研究所紀要」の発行と投稿論文の公募について - 平成27年度COC事業による講演会等の開催方針について
第 6 回	1 月19日		- 公開講演会について（3 件） - 杏林CCRCラウンドテーブル・杏林CCRCフォーラムについて（現状報告） - 予算執行状況について - 平成26年度補助金の使用用途について - 平成27年度工程表について - 地域志向教育研究経費の募集について	- 履修証明プログラム「生きがいづくりコーディネーター」受講科目について - 社会貢献について（保健学部分野 介護講習、感染症予防） - 次年度のふれあいフェアについて 2 月拠点推進委員会の開催について
第 7 回	2 月16日		- 公開講演会について（1 件） - 杏林CCRCラウンドテーブル・杏林CCRCフォーラムについて - 予算執行状況について - 平成26年度工程表について - 米国出張について - 高知出張について	- 来年度人事関係について - 生きがいづくりコーディネーター養成講座修了認定について - 地域活動助成費の募集要項について - 平成27年度調書について - 全学アンケートについて
第 8 回	3 月16日		- 公開講演会について - 杏林CCRCラウンドテーブル・杏林CCRCフォーラムについて - 予算執行状況について - 高知出張について - 生きがいづくりコーディネーター養成講座修了式について	- 平成27年度調書について - 平成26年度実績報告書の提出について - 生きがいづくりコーディネーター養成講座修了認定について - 次年度杏林CCRC拠点推進委員会について

杏林CCRC研究所活動について

大学が持つ知的資源をより広く地域住民へ還元



杏林CCRC研究所 所長 蒲生 忍

杏林CCRC研究所では、平成26年度の地（知）の拠点整備事業の地域貢献活動として、大学が持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、本事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に関連する一連の公開講演会を実施しました。公開講演会は平成26年 5 月から平成27年 3 月の期間に延べ26回に上り、その多くは映像資料化しており、研究所で随時閲覧可能です。この活動においては広報企画調査室、杏林医学会等の協力を得ました。

杏林CCRC研究所では、9 件の地域志向教育研究費を採択し、研究助成費を配布することで、その研究活動の支援を行いました。

研究所では「持続可能な都市型高齢社会の未来像」を研究テーマに掲げ、独自の研究活動を展開しました。特に蒲生は平成25年度と26年度の米国CCRCの視察を踏まえ「少子高齢社会における医療倫理」、特任助教の松井は「米国における継続的ケア付高齢者コミュニティ CCRC の現状と課題」をテーマとする論文を杏林CCRC研究所紀要に発表しました。客員研究員の樋口範雄氏（東京大学大学院法学政治学研究科・教授）から「特別養護老人ホームへの入所契約書の検討」、松田智生氏（三菱総合研究所・主任研究員）から「海外に学ぶアクティブシニア」に関する研究成果が紀要に寄稿されました。研究所では定期的にセミナーを開催しその研究活動を報告検討し、地域志向教育研究の進捗状況を検討しました。

杏林大学の地域医療と健康寿命延伸への貢献の現状を明らかにするため、杏林医学会の協力を得て、合計21論文からなる「特集：杏林大学と地域医療」を杏林医学会雑誌に企画編集し随時公開しました。

蒲生は保健学部において「保健学概論」「ホスピタリティ論」「発達心理学」「医学概論」等の講義において「地域と大学」に関する講義を担当し、杏林大学の地域との関わりとCOC事業の概要について説明しました。また、松井は客員研究員樋口氏の東京大学での「高齢者法」講義に参加し、次年度からの教育活動の準備を進めました。

なお、研究所の研究活動、セミナー、地域志向教育研究及び講演会活動の詳細については研究所紀要に報告しました。

1研究①

杏林CCRC研究所セミナー報告

■第4回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年 4 月18日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	蒲生忍、松井孝太			
講	演	テーマ「地域医療ネットワークの確立を目指してー広島県【地域活性化総合特区】尾道地域医療連携推進特区についてー」			
概	要	松井孝太特任助教による広島県尾道医療連携推進特区調査出張についての報告の後、地域医療ネットワーク普及についての取り組みについて、議論を行った。			
参	加	者山口亮三、荒川浩一（三鷹ネットワーク大学）、林田昭子（鷹口コ・ネットワーク大楽）、濱絵理子（一般社団法人てとて）、中村康人（中外製薬㈱）、熊谷文枝（名誉教授）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第5回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年 5 月16日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	蒲生忍、松井孝太			
講	演	テーマ「平成25年度三菱総研委託事業の総括：【地域と大学】講義のあり方について」（蒲生） 「東大米国高齢者法講義の概要：連携遠隔講義の可能性について」（樋口氏）			
概	要	本研究所長の蒲生が、平成25年度に本学からの委託で日本各地の大学における地域連携関連プログラム及びカリキュラムを調査した三菱総研の報告書をもとに地域連携教育の検討を行い、委託事業を総括した。また、樋口氏の講演では、東京大学法学部で平成26年度後半に開講が予定されている「高齢者法」の講義概要が紹介されるとともに、遠隔講義システムの活用による地域高齢者の参加といった連携可能性等が提案された。			
参	加	者樋口範雄（東京大学大学院教授、杏林CCRC研究所客員）、古本泰之（外国語学部）、太田ひろみ（保健学部）、清水みさ子（八王子事務部教務課）、氏江規雄（八王子事務部教務課）、依田千春（地域交流課）、井上昌子（地域・大学間コーディネーター）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第6回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年 6 月20日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	下島裕美（杏林大学保健学部 心理学・社会福祉学研究室 准教授）			
講	演	テーマ「死生学教育を考える」			
概	要	下島准教授から、死生学教育の概要と意義について、専門である認知心理学の観点から説明がなされた。地域医療の中心的存在であり、死と向き合う機会の多い医療職を輩出する本学において、また、今後の社会を支える若年世代の教育にあたり、死生学教育のあり方と意義をより深く考える必要性を示すセミナーであったと思われる。			
参	加	者濱絵里子（一般社団法人てとて）、岡田美佐子、中村克久（在宅ホスピスボランティアさくら）、林田昭子（NPO法人鷹口コ・ネットワーク大楽）、高野修一（東急不動産ホールディングス㈱住生活研究所）、下島裕美（保健学部）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第7回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年 7 月25日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	ポール・スノードン Paul Snowden（杏林大学 副学長）			
講	演	テーマ「イギリスの高齢者事情について」			
概	要	イギリスにおける高齢者ケアの歴史的背景と現状について、講師のスノードン氏による解説が行われた。イギリスの高齢者ケア事情には日本とは異なる点も多々ある一方で、国民皆保険制度の下での高齢化への対応など、共通する部分も多い。今後の日本における高齢者ケアのあり方を考える上でも、非常に示唆に富むセミナーであった。			
参	加	者濱絵里子（一般社団法人てとて）、林田昭子（NPO法人鷹口コ・ネットワーク大楽）、熊谷文枝（名誉教授）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第8回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年 9 月26日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	蒲生忍（杏林CCRC研究所長）、相見祐輝（同特任助教）、松井孝太（同特任助教）			
講	演	テーマ「CCRC研究所上半期活動報告と下半期予定」			
概	要	蒲生研究所長からは上半期の研究所活動の全体像について説明がなされ、相見特任助教からは三鷹地域での講演会活動について説明が行われた。また、松井特任助教からは、研究所セミナーと教育研究活動、外部研究会への参加について報告が行われた。三名の報告後、参加者を交えて研究所活動について活発な意見交換がなされた。			
参	加	者山田浩之（大日本印刷㈱）、依田千春（地域交流課）、古本泰之（外国語学部）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第9回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年10月30日(木)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	市川一宏氏（ルーテル学院大学学事顧問・教授）			
講	演	テーマ「三鷹市の地域ケアネットワークと包括ケアについて」			
概	要	三鷹市においてこれまで積み上げられてきた地域ケアの取り組みと今後の課題について、三鷹市で長年、地域ケアネットワークや包括ケアの活動に取り組まれてきた講師の市川氏から直接情報を得ることができたうえ、三鷹市関係者との共通理解も深められ、今後の杏林大学の役割を考えていく上で、非常に有益なセミナーであったと思われる。			
参	加	者河村孝（三鷹市副市長）、伊藤幸寛（三鷹市健康福祉部長）、馬男木由枝（三鷹市高齢者支援課長）、海老澤博行（三鷹市地域ケア担当課長）、土屋宏（三鷹市企画部調整担当部長）、大朝摂子（三鷹市企画経営課長）、古園純一（三鷹市高齢者支援課担当課長）、斎藤大輔、吉田、半田知牙（企画経営課）、古本泰之（地域交流委員長）、依田千春（地域交流課課長）、加藤雅江（医療福祉相談室）、清水みさ子、氏江規雄（八王子事務部教務課）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第10回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年12月11日(木)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	高木眞佐子（外国語学部）、太田ひろみ（保健学部）、芝原美由紀（保健学部）			
講	演	テーマ「平成26年度地域志向教育研究報告」			
概	要	平成26年度地域志向教育研究について3氏より、それぞれ「動画を用いて地域活動を英語で発信し、海外からの興味を醸成する活動」（高木氏）、「大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究ーアクションリサーチを通じた実践研究ー」（太田氏）、「障害者スポーツ「ボッチャ」による高齢者の体力作り ー八王子モデルの検討ー」（芝原氏）と題した報告が行われた。			
参	加	者井上昌子（地域・大学間コーディネーター）、吉田理絵（やさしい手）、馬場聡、榎本具紀（銀座ホールディングス）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第11回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年12月12日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	進邦徹夫（総合政策学部）、岡村裕（総合政策学部）			
講	演	テーマ「平成26年度地域志向教育研究報告」			
概	要	平成26年度地域志向教育研究について2氏より、それぞれ「三鷹市、八王子市、羽村市におけるソーシャル・キャピタルと災害に関する研究」（進邦氏）、「介護サービスにおけるTask-Shiftingの実態と課題に関する研究 ー高齢ボランティアへのTask-Shiftingの可能性ー」（岡村氏）と題した報告が行われた。			
参	加	者杉本正隆（三鷹市）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

■第12回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成26年12月19日(金)	場	所	杏林CCRC研究所
講	師	大木幸子（保健学部）			
講	演	テーマ「平成26年度地域志向教育研究報告」			
概	要	大木氏は、「生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討」と題した報告を行い、支援事例における支援過程の分析による、生活保護受給世帯の子ども・若者への効果的な支援方法の抽出について解説した。			
参	加	者杉本正隆（三鷹市）、片桐朝美（保健学部）、蒲生忍、相見祐輝、多田時枝			

■第13回 杏林CCRC研究所セミナー

日	時	平成27年 1 月19日(月)	場	所	杏林大学三鷹キャンパス 看護・医学研究棟 6 階 604教室
講	師	木暮健太郎（総合政策学部）			
講	演	テーマ「平成26年度地域志向教育研究報告」			
概	要	木暮氏は、「羽村市におけるローカル・ガバナンスの実践と若年層を活用した地域活性化に向けた試み」と題した報告にて、羽村市の若年層への意識調査やはむら若者フォーラムへの関与、未来カフェ・未来フェスへの参加といった活動を通じた、本学COC事業の連携自治体である羽村市の地域活性化をめぐる課題や解決策についての研究成果を解説した。			
参	加	者井上昌子（地域・大学間コーディネーター）、蒲生忍、松井孝太、相見祐輝、多田時枝			

地域志向教育研究費について

■平成25年度 地域志向教育研究費

責 任 者	所 属	職名	分 担 者	研究期間	研究テーマ	区分	項 目
蒲生 忍	保健学部	教授		平成26年2月1日 ～平成26年3月31日	生活習慣病の遺伝的背景に関する研究：高齢者ネット社会でのDTC検査の問題点	一般	少子高齢

■平成26年度 地域志向教育研究費

責 任 者	所 属	職名	分 担 者	研究期間	研究テーマ	区分	項 目
蒲生 忍	保健学部	教授	CCRC研究所 松井孝太助教	平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	三鷹市での医療情報ネットワーク構築に向けた問題点と検討課題の整理	一般	少子高齢
			三鷹市企画部企画経営課 大朝摂子課長				
			三鷹市企画部 企画経営課 齋藤大輔主任				
			杏林大学 熊谷文枝名誉教授				
吉野 秀朗	医学部	教授	医学部 近藤晴彦教授	平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	杏林大学と地域医療の情報ネットワーク構築の基盤技術に関する検討	一般	少子高齢
			CCRC研究所 蒲生忍教授				
			医療福祉相談室 加藤雅江				
			病院管理部 清水高志				
進邦 徹夫	総合政策学部	教授		平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	三鷹市、八王子市、羽村市におけるソーシャル・キャピタルと災害に関する研究	一般	災害
岡村 裕	総合政策学部	准教授	総合政策学部 北島勉教授	平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	介護サービスにおけるTask-Shiftingの実態と課題に関する研究	一般	健康寿命
芝原美由紀	保健学部	准教授	保健学部 原口裕希助教	平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	障害者スポーツ「ボッチャ」による高齢者の体力作り 八王子モデルの検討	一般	健康寿命
太田ひろみ	保健学部	教授	保健学部 朝野聡准教授	平成26年4月1日 ～平成27年1月31日	大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究 ーアクションリサーチを通した実践研究ー	一般	生きがい
			外国語学部 井手拓郎准教授				
			保健学部 亀崎路子教授				
			保健学部 佐々木裕子准教授				
			保健学部 楠田美奈助教				
			保健学部 太田真理子助教				
			保健学部 大屋千鶴助教				
大木 幸子	保健学部	教授	保健学部 片桐朝美講師	平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討	一般	生きがい 健康寿命
木暮健太郎	総合政策学部	准教授		平成26年4月1日 ～平成27年3月31日	羽村市における若年層を中心とした地域活性化に関する研究	一般	生きがい
高木眞佐子	外国語学部	教授		平成26年4月8日 ～平成27年3月20日	英語による地域活動情報の動画発信の実施とその教育方法に関する研究	教育	生きがい

「地域と大学」講義
今年度より全学1年次必修科目としてスタート

本学は、平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の採択を受けたことにより、全学1年次必修科目「地域と大学」を、今年度より開講した。前期からは、医学部並びに保健学部、後期からは、総合政策学部並びに外国語学部にて「地域と大学」の授業が始まったことにより、全学的な取り組みとして歩みを進めた。

授業では、地（知）の拠点整備事業としての杏林CCRCの概念や、2年次以降の学習の基礎として地域における大学の役割や地域を取り巻く課題、地域での学び方などについて解説。また、本学が軸とする八王子市、三鷹市、羽村市の関係者の方を招き、各市3週に渡り、講義や演習による授業が行われた。

以下、各市の授業レポートである。

●八王子市

平成26年10月22日～11月5日まで、八王子市保健所の方に講義やコメントをいただいた。

10月22日は「大学生の食の問題点」をテーマに、八王子市保健所 健康政策課 保健栄養担当 廣瀬重美氏、29日は「健康寿命の延伸に向けて～大学生の食生活を考える～」をテーマに、八王子市保健所 健康政策課 田上今日子氏に講義をご担当いただいた。

2週に渡り、学生たちはグループワークを行い、大学生の食生活をテーマに地域での取り組みについてアイデアを出し合うと共に、長い期間で見た自分たちの健康の課題や解決方法について考え、3週目には発表を行った。

学生たちからは、「一人ひとりの意識で食生活が変わる」「現状を改善するため 自分・地域・行政」など意欲的な解決プランが提案された。

●三鷹市

医学部1年生による、「地域と大学」の学習発表会が平成26年11月15日、臨床講堂で行われた。

学生たちは、4月と5月に厚生労働省の技官や三鷹市の健康福祉部門伊藤氏などから、国や地域の医療・福祉政策などについて講義を受けたあと、7～8名ずつのグループに分かれてそれぞれ研究テーマを決め、担当教員の指導

のもと、三鷹市役所等の協力を得て医療・福祉の現場でフィールドワークを行ってきた。

学習発表会での発表テーマは、救急医療体制、児童虐待、保育園の待機児童、周産期医療、老人介護、地域包括支援センターなど多岐に渡った。現状の調査報告だけでなく、改善のための提言をまとめたグループもあり、また三鷹市の高齢者福祉を学んだグループは、「自分達医学生は、学生のうちからチーム医療に目を向け、自分たちが将来チームの一員として活動することを自覚し、地域の福祉に関わっていくかを広い視野で常に考えておくことが必要である」との決意を語った。

●羽村市

平成26年12月3日、総合政策学部・外国語学部の「地域と大学」の中で、羽村市産業環境部産業課 平田氏にご担当いただき、講義を行った。

1回目の企画総務部企画政策課に続き、羽村市で担当していただくのは2回目となる。今回は羽村市の産業課は業務内容の紹介から始まり、大型ショッピングモールの進出により過疎化を強いられているまちの商店街の現状などを、詳しくお話しいただいた。

学生は「地域にとって魅力ある商店街とは？」を中心とした課題に、1回目のグループワークとは違った目線で取り組み、討議と発表を行った。これまで毎回行ってきたグループワークで磨かれたセンスと発想力を活かし、羽村市の商店街を盛り上げるきっかけとなる授業を行うことができた。



「地域と大学」講義風景

「生涯スポーツの機会提供」プログラム

■実施日：H26/6/28、7/5、7/26、8/23、9/20、9/27、10/18、11/8、11/15、12/13、H27/1/10、1/24、2/21、2/28、3/28
■担当者：石井博之 保健学部 理学療法学科 准教授
楠田美奈 保健学部 看護学科 助教
原口裕希 保健学部 理学療法学科 助教
星谷綾香 保健学部 理学療法学科 助教

目 的

今までの地域交流活動において、健康と運動に関する相談を受けてきた。その多くは、「運動の必要性は感じているもののきっかけがない」「何から始めていいかわからない」「運動をすると腰痛など痛みが起こるので続けられない」「運動を続けているが効果を感じられない」などであった。そこで杏林大学保健学部の専門性を活かし、日常の運動を多方向からサポートすることにより、健康で活力ある生活を送る一助となれればと考え、今年度から本プログラムを開始した。

実施内容

本プログラムは、羽村市保健センターおよび羽村市スポーツセンターと共同で実施している。まず個別に運動に関する相談を受け、その目的や希望、痛みなど運動時の問題などを明確にする。それに併せ、学生とともに体力測定、身体機能評価を行い、結果とニーズに合わせた運動の提案を行っている。また定期的に参加することで、再評価によ

る運動効果を提示し、効果を実感することでモチベーション向上を促している。

加えて1人1人が、運動の目的に合わせ、楽しく、継続可能な運動種目を見つけられること、多種多様な運動を取り入れることで、運動効果を高めることを目的に、様々な運動の機会を提供するように心がけている。今年度は「歩こう会」を2回実施し、「ポールウォーキング」や「ノルディックウォーキング」を紹介、体験していただいた。

実施効果

月2回程度の開催であるが、参加者も多く集まり、満足度は高くニーズにあったプログラムであると感じている。今後はさらに多様な運動を提供し、加えて個々の運動に対して体力・能力などでのグルーピングを行ったり、1人1人に合ったオーダーメイドの運動を提案したりとさらに工夫を重ね、地域の健康寿命延伸に資する活動としていきたいと考えている。



心肺運動負荷モニタリングシステムを用いた
体力・身体機能評価

障害者（児）スポーツの理解向上と参加支援

■実施日：H26/12/19
■担当者：芝原美由紀 保健学部 理学療法学科 准教授
二田 孝 八王子市立第四小学校 校長

目 的

障害者（児）スポーツの理解向上のために、地域の普通小学校に在籍している子どもたちに、体験事業実施、情報

提供、事後学習等を行う。本学理学療法学科学生が車椅子バスケット事業の選手らと協働し計画を立案し、小学校や障害者（児）団体の協力を得て進めていく。

実施内容

講師に、横浜リハビリテーション事業団 横浜ラポールの伊藤俊之氏と車椅子バスケットチームの選手数名で、小学5年生58名と教員を対象に、車椅子バスケット体験を実

施。車椅子（日常用とスポーツ用）や競技ルールについての説明を行う。小学生5～6人に対し車椅子1台を渡し、模範演技のほか、実際に子どもたちに車椅子を操作してもらい、パスやシュート練習、ミニゲームを行った。

実施効果

障害者がスポーツをすることへの理解を広める事業を通して、本学学生は社会貢献を学ぶ機会となった。



実際に車椅子に乗り、ミニゲームを実施

八王子市平岡町 わくわく健幸教室

■実施日：H26/4/12、4/26、5/10、5/24、6/14、6/28、9/27、H27/1/10
■担当者：榎本雪絵 保健学部 理学療法学科 准教授

目 的

教室開催の目的は、八王子市平岡町在住の高齢者を対象に定期的な健康に関する講義と体操を組み合わせた健幸教室を開催し、健康増進、健康教育を行うことである。

また、管轄の地域包括支援センター子安職員と連携し、住民主体で教室開催できるようにすること（自主運営化）、自主運営化した教室開催の継続を支援することを目的としている。主に本学理学療法学科の学生の協力のもと、継続して取り組んでいる。

実施内容

●健康教室の開催

平岡町在住の高齢者（平岡町老人会）を対象に、健康教育としての健康増進に関する講義、健康増進のための運動介入として、セラバンドを用いた体操を中心とした運動プログラムの立案と実践、運動効果の提示と動機づけのための3カ月ごとの定期的な体力測定を2013年7月14日から2014年6月28日までの毎月第2・4土曜日（9:30～11:30）に平岡町町内会館で実施した。参加学生は参加者に対する運動指導や体力測定の補助などを行った。

●自主運営化とフォローアップ

参加者におけるリーダー育成、体力測定結果の報告会を行い、7月以降は地域住民による自主運営となった。自主運営化した健康教室の継続支援のため、自主化3カ月後（9月）にフォローアップとして教室状況や参加者の生活状況の聴取と対応を行い、自主化6カ月後（翌1月）に体力測定を実施した。

実施効果

●参加者

「学生さんについてもらえるので安心して体操できた」「丁寧にわかりやすく、教えてもらえてとっても良かった」との言葉があり、学生や参加者間の交流も活発に行われていた。また、自主運営化後も参加者の生活状況や身体機能は維持できていた。

●参加学生

「大学で学んでいることが実践でき、非常に勉強になった」「高齢者の方と交流する機会となり有意義だった」との言葉があり、有意義な学習機会となり、学習意欲の向上にもつながると思われた。



セラバンド体操を学生が補助している様子



体力測定結果報告会の様子

八王子市におけるエイズ・ピア・エデュケーション

■実施日：H26/ 5 /18	八王子市健康フェスタ
7 / 7	八王子市立鎌水中学校
10/18	帝京大学学園祭
H27/ 2 /16	エイズボランティア講習会
3 / 6	コミュニティセンター akta
3 / 9	八王子市立第一中学校
3 /10	八王子市立中山中学校
3 /12	八王子市立別所中学校
■担当者：北島 勉	総合政策学部 教授
マルコム・フィールド	総合政策学部 教授

■ 目 的

八王子市保健所と合同で行ってきたエイズ・ピア・エデュケーション及び中学生を対象とした健康教育活動をもとに、八王子市内ほかでピア活動を行い、若者にHIV/AIDSや健康に関する情報提供することを目的とする。

■ 実施内容

八王子市富士森公園で行われた八王子市健康フェスタでは、八王子市保健所のブースにおいて、来場者にHIV/AIDSクイズやパンフレットの配布を通して、性感染症を含むHIVに関する情報提供を行った。

また、市内の中学校などでは、八王子市保健所とともにHIV/AIDSに関するピア活動を行い、HIVを含む、感染症に関する情報提供をするとともに、異性とのつきあい方に関して考える機会を提供した。

その他、東京都が実施したエイズボランティア講習会への参加やHIV/AIDSなどの情報を発信しているコミュニティセンター aktaにて、活動の概要についてヒアリングなどを行った。

■ 実施効果

市内の中学生をはじめとする若者に、HIV/AIDSに関する情報提供を行うことで、エイズや命の大切さについて一緒に学び、考える機会を提供することができた。



エイズ・ピア・エデュケーション活動の様子

学校定期健康診断の補助

■実施日：H26/ 4 /11	八王子市立石川中学校
4 /16	東京都立国立高等学校
4 /18、4 /21、4 /24、5 / 2、6 / 2、6 /19	足立区立第九中学校
4 /24	八王子市立ひよどり山中学校
4 /24	東京都立国分寺高等学校
4 /24	荒川区立原中学校
■担当者：大嶺智子	保健学部 健康福祉学科 教授

■ 目 的

学校を拠点としたヘルスプロモーションの健康戦略が浸

透しつつある昨今、健康づくりが展開される学校保健活動活性化の一翼を担うべく、社会貢献活動として学校定期健康診断における補助依頼に対応していくこと。

■ 実施内容

上記6校に対して、保健行事である学校定期健康診断の補助に協力。補助活動前には、学内にて、各学校より届いた「学校定期健康診断実施要項」を資料に、担当教員が事前指導を実施した。

通常授業で学んだ健康診断の準備・実施・片付け・事後措置等について、実践を通して知識の整理や定着を図ったり、出身校（小学校・中学校・高等学校）での健康診断や

学校ボランティア校で経験した健康診断補助などと比較することで、各自が目指している養護教諭の立場で健康診断実施における共通性と個別性を考える機会とした。

■ 実施効果

教職員の連携、マネージメントの重要性、児童生徒への指導における理解が深まることで、自分自身の課題を見出し、勉強の意欲も高まるなど現場体験による教育効果がみられた。また、その後に始まる3週間の養護実習期間中に健康診断の一部が組み込まれていることも多いことから、本経験は事前学習の意味合いも強く、良い準備状態で、養護実習に臨むことができた。

子育て支援プログラム

1

妊娠期から生育期の多胎児支援

- ①「多胎育児準備クラス」
- ②「ピアサポーターによる訪問活動」
- ③「ピアサポーター養成講座」
- ④「ツインズマーケット」

■実施日：①「多胎育児準備クラス」

1 回目	H26/ 7 / 5	2 回目	7 / 18
3 回目	10/ 4	4 回目	10/18
5 回目	H27/ 1 /10	6 回目	1 /17

②「ピアサポーターによる訪問活動」

1 回目	H26/ 6 /25	2 回目	11/26
3 回目	11/29		

③「ピアサポーター養成講座」

H26/12/ 6

④「ツインズマーケット」

H27/ 3 / 7

■担当者：太田ひろみ 保健学部 看護学科 教授

佐々木裕子	保健学部 看護学科 准教授
山内 亮子	保健学部 看護学科 学内講師
鈴木 朋子	保健学部 看護学科 助教

■ 目 的

- ①「多胎育児準備クラス」 多胎妊娠中の妊婦や家族が医療・看護の専門職や多胎育児経験者と交流を持ち、不安や問題点の解決、ならびに多胎児の親同士の交流の場を提供する。
- ②「ピアサポーターによる訪問活動」 多胎妊娠期から育児期の当事者に対して、同じ多胎妊娠・出産・育児の経験者

各学校からは学生の協力によりスムーズに健康診断が実施できたとの感謝の言葉をいただいております、補助活動の輪は年々広がってきている。



定期健康診断での補助活動の様子

であるピア（仲間）が、当事者の悩みや不安に寄り添い、支え合うことを目的とする。

- ③「ピアサポーター養成講座」 多胎育児支援の活動として、「訪問型の支援」の意義も考慮した、「多胎育児における妊娠期から育児期を通してのピアサポート活動」に取り組むため、ピアサポーターの養成講座を開催した。
- ④「ツインズマーケット」 三鷹キャンパスにて、多胎育児中の家族が年に一度集まり、相互支援・教育を行うことを目的とした「ツインズマーケット」の第10回目を開催した。

■ 実施内容

- ①「多胎育児準備クラス」 産科医師や助産師による講義や多胎育児経験者による講話を行った。
- ②「ピアサポーターによる訪問活動」 依頼があった多胎育児家庭を、ピアサポーターが訪問し、不安や悩み、今望んでいることを傾聴した。
- ③「ピアサポーター養成講座」 多胎児経験者を対象に、活動内容や基本的な技術などピアサポーターの養成講義を行った。
- ④「ツインズマーケット」 前半は、「子どもの個性を伸ばす子育てのヒント」をテーマに、津田博紀先生（引きこもり



多胎育児準備クラスの様子

相談津田心理相談室室長)による講演会、後半はグループワークを行った。

■ 実施効果

- ①「多胎育児準備クラス」 妊婦や家族は、産科医師や助産師から妊娠期の生活や出産についての講義が聞けて、具体的なイメージづくりに役立ったことがうかがえた。
- ②「ピアサポーターによる訪問活動」 訪問したピアサポーターに、直接打ち明けることによって、当事者の不安や悩みを解消することができた。
- ③「ピアサポーター養成講座」 多胎育児経験者にピアサポーターの活動や技術を解説することにより、ピアサポート活動を広めることができた。
- ④「ツインズマーケット」 参加者からは、なかなか多胎育児経験者の話を聞ける機会がないので、とても勉強になったなど概ね好評だった。

2

極低出生体重児親の会
「ぴあんず」における育児支援

- 実施日：1回目 H26/7/12 2回目 10/25
3回目 H27/2/28
- 担当者：吉野 純 保健学部 看護学科 講師
中村 明子 保健学部 看護学科 助教

■ 目 的

付属病院内ボランティア団体「ぴあんず」を中心に、1800kg未満で出生し、NICU/GCUを退院した極低出生体重児と家族を対象に行う育児支援活動である。年に4回ほど、専門家による講習や相談を実施し、その間学生が子どもを預かり遊びや授乳を行う。目的は、家族への知識や情報の提供、心理的ケアとピアサポートであり、子どもにとっては、親と離れて仲間と触れ合う時間を過ごす場となっている。

■ 実施内容

それぞれ以下の講演を実施。講演後はフリートークを行った。



学生による育児支援の様子

- 1回目（平成26年7月12日）
「発達検査・認知検査について」 島崎医師（本学小児科）
- 2回目（平成26年10月25日）
「就園・就学について」 田中容子さん（三鷹市学務課）
- 3回目（平成27年2月28日）
「リハビリについて」 竹田さん（付属病院理学療法士）
子どもたちは、学生が別室にて、安全に配慮してお預かりし、育児支援を行った。

■ 実施効果

専門家を講師に招いた講演では、真剣に耳を傾ける参加者の姿が見受けられた。また、フリートークでは、積極的な質疑応答があり、参加者の関心の高さがうかがえた。

学生による育児支援では、子どもたちとのふれあいの中で、実際に育児に携わる難しさを感じ、体験を通して学び考える貴重な機会となっていた。

3

保護者が幼児に性教育を行うための支援

- 実施日：H26/8/26 ちどりこども園（三鷹市）
8/27 南浦東保育園（三鷹市）
8/28 下連雀保育園（三鷹市）
8/28 高山保育園（三鷹市）
8/29 中原保育園（三鷹市）
8/29 新川保育園（三鷹市）
9/8 ひなざく保育園（小金井市）
9/9 西野保育園（三鷹市）
9/10 南浦西保育園（三鷹市）
9/11 あけぼの保育園（三鷹市）
9/12 中央保育園（三鷹市）
9/20 精華第二保育園（武蔵野市）
9/20 こどもの家八栄寮（児童養護施設、八王子市）
H27/3/3 東京学芸大学附属竹早幼稚園（文京区）
3/11 ちどりこども園（三鷹市）
- 担当者：土屋有利子 保健学部 看護学科 准教授

■ 目 的

「いのちの大切さ」を伝えるために、三鷹市および周辺の保育園に通う4～5歳児とその保護者を対象に「いのちのおはなし会」を実施し、保護者と意見交換を行った。これは、①いのちは尊いものであり大切なものであることを知る ②保護者が子どもからの命や身体に関する疑問に適切に対応することができること、を目的としている。

■ 実施内容

「いのちのおはなし会」では、いのちのはじまり（受精）から母親の子宮内で胎児が育つ様子を胎児人形とパネルで示し、子どもたちに応援してもらいながら出産するまでの様子を学生の寸劇で説明した。身体を守ることにについては、男女の子どもの身体を示し、違いを確認したうえで、プライベートゾーンを自分で守ることを説明した。おはなし会終了後、参加した保護者や職員と意見交換を行った。

この15活動には園児を中心に339名、保護者73名、職員53名、本学学生のべ78名が参加し好評のうちに終了した。

■ 実施効果

参加した保護者には、今回の感想と今後の要望についてアンケートを実施。「子どもがおはなしの内容を真剣に受け止めていた」「子どもにわかりやすい言葉を使っていて、家庭での対応の参考になった」などの意見があった。



真剣におはなしに聞き入る子どもたち

10 社会貢献活動

生きがい創出②

住み慣れた地域で過ごすための
「在宅・あぷりこツーカーチーム（仮称）」作り

- 実施日：1回目 H26/8/8 2回目 11/27
3回目 H27/1/22 4回目 2/4
5回目 2/24 6回目 3/4
- 担当者：大金ひろみ 保健学部 看護学科 准教授
柴崎 美紀 保健学部 看護学科 講師

■ 目 的

病院を退・外来通院する方々が、安心して自宅で生活するための、病院内外の看護及び福祉の専門職による連携活動を促進することを目的とする。退院支援の質の向上、病院と地域の専門職が関わった患者・家族の「その後」がわかる連携を目指す病院内外の組織として「在宅・あぷりこツーカーチーム（仮称）」のベースをつくる。

■ 実施内容

杏林大学と地域の看護連携活動の促進を目的に、杏林病院退院後の患者が利用する3カ所の訪問看護事業所で、計4回の事例検討を行った。

〈事例内容〉

- 杏林大学病院婦人科病棟を退院された患者に関する事例検討
 - 杏林大学病院消化器内科病棟を退院後に在宅へ移行した事例についての検討
 - 杏林大学病院NICU/GCUを退院された患者に関する事例検討
- それぞれ杏林病院・訪問看護ステーション・から各支援内容と課題を出し合い、退院時期、退院後の支援内容等について検討を行った。
- また、杏林病院の退院支援リンクナースおよび近隣病院の看護師を対象に「在宅看護に向けた急性期病院の看護師

の役割」についての講演会を実施した。

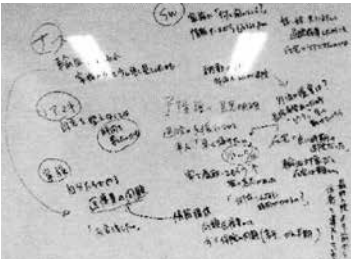
3月4日には、今回の活動について院内参加者と共に振り返った。

■ 実施効果

杏林病院では、「院内での退院支援の時期が遅すぎる」とや「本人・家族の日常生活の具体的な情報にもとづく支援の必要性」等について意見があった。また、外部事業所では、「病院側の課題や気づきが地域へ直接フィードバックされる機会の重要性」等が指摘された。さらに、院内・外部事業所ともに、「長期的視点での医療をとまなう生活課題に対する支援（食事・リハビリテーション等）についての検討の必要性」について意見が寄せられた。



ディスカッションの様子



羽村東口商店街 ヒアリングプロジェクト

- ①「ヒアリング調査」
- ②「フォローアップ・ミーティング」
- ③「勉強会」

■実施日：①「ヒアリング調査」 H26/8/1、8/2
②「フォローアップ・ミーティング」 10/26
③「勉強会」 H27/3/16

■担当者：三浦 秀之 総合政策学部 講師
進邦 徹夫 総合政策学部 教授
木暮健太郎 総合政策学部 准教授
井手 拓郎 外国語学部 准教授

目 的

羽村市東口商店会(羽村駅東口エリア)の活性化を目的に、商店主へのヒアリング調査やワークショップ、勉強会を行った。

実施内容

- ①「ヒアリング調査」 今回のプロジェクトは、羽村市産業環境部産業課、企画総務部企画政策課による協力のもと、活動を展開した。学生は複数のチームに分かれて羽村駅東口エリアの商店20軒を訪問し、各店舗の現状や課題、商店主がとらえる商店街の魅力などについてヒアリングを実施した。その後、ヒアリングの結果をもとに商店会活性化プランを発表するワークショップも開催した。
- ②「フォローアップ・ミーティング」 ヒアリング調査の2カ月後、フォローアップ・ミーティングも兼ねて、ワークショップを開催。ヒアリング調査を踏まえたうえで、



フォローアップ・ミーティングの様子

地域活性化のアイデアを模造紙に貼り、最終的に活性化案のプレゼンテーションを行った。

- ③「勉強会」 魅力ある羽村東口商店会を目指すべく、講師を招き、更なる活性化に向けた勉強会を行った。講師には、長野県諏訪市 産業連携推進室 主査の河西俊明氏を迎え、地域ブランド「SUWAプレミアム」の成功例をご紹介いただいた。その後に開催された「杏林・羽村コモンズ」では羽村市職員、本学教職員、学生の他、商店会や商工会の方合計20名と河西氏とで、羽村市と諏訪市の事例比較を取り入れながら活発な意見交換がなされた。

実施効果

- ①「ヒアリング調査」 ヒアリングでは、各店舗の事業者が考える地域活性化のプラン、アイデアを聞き出すことに成功した。また、ワークショップでは、ヒアリングを行った店舗の事業者も参加し、学生のアイデアが活性化プランの一つとして前向きに検討されることとなった。
- ②「フォローアップ・ミーティング」 ワークショップで提示されたアイデアの一つは、すでに学生を中心として実現に向けた活動が展開されており、企画案の検討から実施に至るまでのプロセスが確立されるようになりつつある。ヒアリング調査から2カ月後に行われたフォローアップのワークショップが大きな役割を果たしたと考えている。
- ③「勉強会」 本学教職員と羽村市職員との打ち合わせや意見交換会は何度も実施しているが、羽村市民の方の考えを直接伺う機会は初めてだった。今後もこのような有意義な機会を設けていきたい。



商店でのヒアリングの様子

音楽（吹奏楽）を活かした幼児及び障がい者・高齢者の生きがい創出活動

- 実施日：H26/7/19 多摩特養老人ホーム
9/15 多摩特養老人ホーム「敬老祝賀会」
10/5 知的障害者更生施設
とぶき育成園「ポンボコ祭り」
10/18 ①有料老人ホーム 登美喜心成苑「秋祭り」
②多摩特養老人ホーム
11/15 多摩特養老人ホーム
12/23 有料老人ホーム 登美喜心成苑
「クリスマス会」
12/24 光明第七保育園「クリスマス会」
12/27 介護老人保健施設 イマジン
「年忘れコンサート」
- 担当者：加藤英世 保健学部 作業療法学科 教授
石野晶子 保健学部 作業療法学科 学内講師



利用者と一緒に歌や楽器を楽しんだ演奏会

目 的

杏林大学吹奏楽団を中心に合唱サークルの学生をあわせて約30名で、依頼先や依頼内容を考慮してアンサンブルを編成。演奏に合わせて、一緒に歌っていただいたり、鈴やカスタネットを叩いていただいたりして交流を深め、幼児や障害者・高齢者の生きがい創出に貢献することが目的である。

実施内容

地域の保育所や障害者施設、高齢者施設からの演奏依頼に応じ、童謡や唱歌、昭和の歌謡曲などの演奏を行った。今回は、吹奏楽団の演奏に加え、利用者の皆さまに鈴やカスタネットで演奏に参加していただくことを初めて試みた。共にリズムに乗り、音楽をつくって交流を深めていく利用者参加型の演奏会となった。

実施効果

いずれの施設でも、利用者の皆さまに非常に喜んでいただき、笑顔になる方や、涙を流して感動する方、「また来てください」「本当にありがとう」と言ってくださる方も多く見受けられた。吹奏楽演奏と参加者の歌や楽器演奏を通して、幼児や障害者、高齢者の方々が生き生きとできるひと時を作りだすことができ、地域貢献の一助となった。

「私の案内書作り」講座

- 実施日：1回目 H26/12/2 2回目 12/9
3回目 12/16
- 担当者：兎澤恵子 保健学部 看護学科 教授
渡辺洋子 保健学部 看護学科 講師
大屋千鶴 保健学部 看護学科 助教

目 的

高齢者一人一人が、人生の後半を自分らしく過ごすために、健康である間に高齢者自らが考える機会を用意しサポートすること、さらに自分の生活習慣や好みなどを記録

したノート「私の案内書」を作成することで、価値観の再認識・再検討を行うとともに、意思伝達能力の低下時に、家族や医療従事者、介護者などに意思や個性性を伝える際に活用できるようにすることが目的である。

実施内容

三鷹ネットワーク大学と共催し、90分の講座を3回に渡り行った。

●1回目

「私の案内書作り」講座の目的と意義、時代背景および

加齢変化について、また、なぜ今のうちに準備する必要があるかなど、具体的に事例を用いながら説明を行った。

● 2 回目

「今までの普段の生活の中で自分が大切にしてきたこと」を想起しながら、自分の行動や価値観を規定している自分らしさについて再確認あるいは再発見する機会とした。

「私の案内書」では、例えば「食べ物は何が好きか?」「寝具はどのようなタイプのもで安眠できるか?」「お風呂の湯の温度はぬるめが好きか、熱めが好きか?」など物心がついてからの自分を、身近な素材を透して見ることができる。

ディスカッションやメモでメッセージ交換をしながら、参加者は普段の自分らしさを振り返り、いざという時に全てを言わなくとも伝えられる、自分の案内書作りに挑んだ。

● 3 回目

ワークショップ、集団および個別対応により案内書作りを進めた。「今後どのように過ごしたいか」という視点から、前回書き込んだ内容について加筆・修正を行った。最後に、受講者全員が全 3 回を通して行った講座内容についての感想を述べ合い、講師からコメントを一言付け加えた。

■ 実施効果

● 1 回目

参加者は、元気で積極的に参加された。アシスタントの学生達は、受付係や会場でのサポートを行いながら、参加

者と共に時代背景や加齢と共に少しずつ自分らしい生き方を準備する必要性について学んだようである。

● 2 回目

参加者の多くは、今までの自分を振り返ってみたいという強い思いを持っており、楽しみながらも真剣に参加していた。アシスタントの学生達は、参加者の生の体験談を聞くことで対象理解を深めることができた。

● 3 回目

参加者からは、「自分と向き合いたかった」「自分の人生を振り返る大切さを知った」「新しい発見もあり終着点に向けて新たなスタートにしたいと思った」などという反応が聞かれ、それぞれが自分のために何かを得て終了されたことを伺い知ることができた。

アシスタントの学生達は、3 回に渡る「私の案内書作り講座」において、どのような成果を得たのかを知り、さらに成人期・老年期にある対象者の理解を深めることができたようである。



熱心に受講する参加者の方々

14 社会貢献活動 生きがい創出⑥

子ども虐待防止シンポジウムの開催

- 実施日：H26/11/8 三鷹ネットワーク大学
- 担当者：楊 國昌 医学部 教授
- 加藤雅江 医学部付属病院 患者支援センター
- 佐伯裕子 三鷹市子ども政策部 子育て支援課

■ 目 的

虐待をさせない親子の良好な関係構築を目指し、コモンセンス ペアレンティング（CSP）を基盤とした「怒らない子育て」のスキルを紹介し、虐待防止に向けた啓発活動、共助ネットワークの確立を目指す。

■ 実施内容

子ども虐待防止月間の11月に、三鷹ネットワーク大学を会場に、三鷹市を中心とした一般市民対象のシンポジウムを開催。「怒鳴らない子育て お母さんと子どもの快適なコミュニケーションを目指して」と題し、3 講演を開催し

た。

- ①「気づくこと・繋がることの大切さー待つ支援から届ける支援へ」（講師：三鷹市役所 子ども政策部子育て支援課 佐伯裕子氏）：子育て家庭（母親）の孤立化や児童虐待を防ぎ、子どもの健全な育成環境を作るには、児童相談所や医療機関、市町村など地域のネットワークがそれぞれの役割を理解して、サポートしていくことが重要であることなどを解説した。
- ②「虐待防止に必要なこと」（講師：杏林大学医学部付属病院 患者支援センター 医療ソーシャルワーカー 加藤雅江氏）：杏林大学医学部付属病院における虐待防止支援の実践例から見てきた、現代の子育ての課題について解説した。事例を活かし、効果的な支援を行っていくためには、地域との連携やネットワークづくりを、中心となって推進していくことも重要な役割であることを示した。
- ③「コモンセンス・ペアレンティング」（講師：子どもの虐待防止センター 青木幸子氏・安永裕子氏）：米国で開発

された児童虐待防止プログラムである、コモンセンスペアレンティング（CSP=Common Sense Parenting）の概要と、プログラムの一部を参加者のロールプレイ等も交えて紹介した。

■ 実施効果

子どもの虐待防止を社会的な共通認識として確立していくために、今回もシンポジウムを通じて、参加した多くの一般市民へ啓発を行い、意見交換する機会が得られた。



シンポジウムの様子

15 社会貢献活動 災害に備えるまちづくり

防災ふれあいフェア等防災プログラム

1

一次救命処置（BLS）を広める

- 実施日：①事前授業 ※羽村市立全中学校 2 年生
H26/ 5 /16（第 1 中学校／ 190名）
6 / 6（第 3 中学校／ 91名）
6 /13（第 2 中学校／ 196名）
- ②BLS指導 ※羽村市立全中学校 2 年生
H26/ 6 / 2（第 1 中学校／ 190名）
6 / 9（第 3 中学校／ 91名）
6 /16（第 2 中学校／ 196名）
- ③BLS指導 ※八王子市立加住小中学校教員
H26/ 6 / 4（15名）
- ④BLS指導 ※都立八王子桑志高校 1 年生
H26/ 7 /15（213名）
- ⑤BLS指導 ※八王子市民
H26/11/ 8（50名）
- ⑥BLS指導 ※八王子市役所職員
H26/11/13（24名）、H27/ 1 /27（32名）
- ⑦BLS指導 ※都立学校職員
H26/12/18（24名）
- ⑧BLS指導 ※八王子市立加住中学校 3 年生
H27/ 3 / 6（24名）

- 担当者：保健学部 救急救命学科 和田 貴子 教授
- 小泉 健雄 教授、千田 晋治 講師
- 中島 義夫 助教、大野 誠 助教
- 井田 喜明 助教、山崎 章彦 助教
- 神山麻由子 助教、久保佑美子 助教
- 久米 梢子 助教、原田 利雄 非常勤

■ 目 的

杏林大学保健学部は、地域に密着した社会貢献事業の一環として、中高生、教員をはじめ、市役所や都立学校の職員などに一次救命処置（BLS）の指導を行っている。これらの取り組みにより、教員および学生の地域貢献への意識向上、技能や指導力の向上が図られることを目的としている。

■ 実施内容

救急救命学科の学生全員にBLS指導者としての経験を積ませるため、胸骨圧迫及びAED（自動体外式除細動器）の取扱い訓練を実施した。また、羽村市内全中学校の 2 年生を対象とした訓練では、小泉教授による事前授業が行われ、救急救命の必要性や「いのち」に対する予備知識などが解説された。

■ 実施効果

参加者からは、災害時等、けが人や急病人が発生した場合、その場に居合わせた人による応急手当が必要なことや、119番通報から救急車が到着するまでの間、どのような処置が適切であるのかなど、対処方法も体験でき、とても貴重な機会となったという声が多く聞かれた。



BLS指導の様子

2

防災ふれあいフェアを開催

- 実施日：H26/11/30（※事前準備 11/29）
■担当者：保健学部 救急救命学科 和田 貴子 教授
川村 治子 教授、島 幸夫 教授
千田 晋治 講師、高橋 宗良 講師
森 数美 講師、中島 義夫 助教
大野 誠 助教、井田 喜明 助教
山崎 章彦 助教、神山麻由子 助教
久保佑美子 助教

■ 目 的

市民に楽しみながら防災意識を高めてもらおうと、本学主催にて「防災ふれあいフェア～家族で楽しむ防災訓練～」を開催した。本学保健学部救急救命学科の教育資源を社会貢献の形で活かそうと、八王子消防署の全面的な協力を得て、初めて行われた。

■ 実施内容

八王子キャンパスの広いスペースを使い、はしご車搭乗体験や煙体験、倒壊建物救助訓練、初期消火訓練、放水訓練、応急救護、火災発見大声体験、ロープ渡り訓練など数々のイベントを実施した。当日は、親子連れなど635名の市民が訪れ、終始賑わいを見せた。

■ 実施効果

イベントを通じて市民に防災意識を高めてもらうとともに、本学の防災への取り組みを広く周知できた。学生も事前準備や当日のイベント運営、参加を通して、防災意識をより身近なものにすることができ、消防職員を目指す救急救命学科の学生にはモチベーション向上の大切な機会になった。



放水訓練の様子

3

第65回全関東八王子夢街道
駅伝競走大会における
応急救護活動等への参加

- 実施日：H27/ 3 /15
■担当者：保健学部 救急救命学科 和田 貴子 教授
小泉 健雄 教授、千田 晋治 講師
中島 義夫 助教、山崎 章彦 助教

■ 目 的

公道を走る駅伝大会としては国内最大規模を誇る「第65回全関東八王子夢街道駅伝競走大会」の開催に伴い、杏林大学保健学部を代表し、八王子消防署と連携の下、救護所における応急救護及び走路におけるAED救護等を担当し、大会参加者の安心と安全の確保を図ることを目的に実施した。

■ 実施内容

八王子市からの依頼に基づき以下の活動を実施した。教員4名は、大会本部の救護所において救護活動及び現地救護所を巡回し、学生に対して救護活動の監督及び指導を行った。

AED（除細動）担当は、自転車にAEDを積載、警戒区域を巡回し不測の事態に備えた。駅伝コースを4区に分け、各区を警戒区域に指定し、学生二人一組で自転車による巡回を行い駅伝選手及び観戦者の救護活動を実施した。救護所担当は、駅伝の出発点及び中継所となる場所に八王子消防署警戒員と連携し救護所を設置、不測の事態に備えた。

■ 実施効果

八王子消防署と連携の下、救護所における応急救護及び走路におけるAED救護等を担当し、転倒者1名が発生したが、他に大きな事故等の発生はなく、駅伝競走大会参加者等の安全の確保が図られ駅伝大会成功の一助となり得た。



AED搭載自転車でコースを巡回

地域・大学間コーディネーターの活動

COC事業を推進して
～種まきから芽生えの時期へ～

地域・大学間コーディネーター 井上 晶子



COC事業の種まきの時期であった25年度を経て、26年度は、新しいCOC事業の芽生えとともに連携の広がりを見ることができました。

そこでのコーディネーターの役割は、できるだけ多くの学生、先生方、自治体職員にこの事業に加わっていただくため、学内や自治体に対する働きかけを強化することでした。

各自治体における連携事業に対する期待は多種多様です。

杏林大学との連携窓口が自治体内に組織的に位置付けられ、自治体全体が、COC事業に対する共通認識を持つことにより、スムーズな連携が進められます。同様に学内の連携体制が、形式的なものから実質的なものに変化することで、多様なニーズ、大量のニーズに対応することが可能となります。大学と地域（自治体）の間を取り持つコーディネーターとしては、双方の理解を深めるため、地域内においては「コモンズ・ポスト」の設置、学内においては「地域交流活動かわら版」の定期的発行を行いました。両者のCOC事業への理解の広がりや学内組織も形式から実効性のあるものへと動き出したことが機動力となり、多くの事業のマッチングを行うことができたと考えています。

COC事業は、単に地域ニーズに応えるものではありません。その過程が、大学の使命である教育、研究、社会貢献に資するものであることは言うまでもありませんが、加えて、地域での活動を通じて学生が何を学びえるのか、どのように自己実現を図ることができるか、将来の生き方の指針となり得るかなど、学生の学びの立場からCOC事業をとらえていくことが求められます。

本報告書において取り上げられている各種事業において、学生が、自治体職員、地域組織、住民とともに地域の課題に取り組んだ過程が杏林大学生としての学びであり、また大学生市民として地域貢献であったといえます。とりわけ、26年度は地域住民や自治体職員とともに企画立案段階から各プロジェクトの運営に当たったこと、「地域と大学」の授業で基礎的な知識を身に付けながら実践に及んだことは、その意義と効果を大きくしていると考えます。

COC事業の2年を振り返り、広義の市民福祉の向上を使命とする自治体にとってのCOC事業の意義を再考する必要があります。COC事業3本柱である「生きがいづくり創出」、「健康寿命の延伸」、「災害に備えるまちづくり」は、一見関連のないと思える市の各施策と深く関連しながら市民の福祉向上につながっていきます。COC事業を大きくとらえ、自治体や地域の人々が、大学の知を取り入れることで、新たな視点を得、新たな方向性を見いだす契機になるよう仕掛けていくこともコーディネーターの役割であろうと考えられています。

第2回 杏林CCRCラウンドテーブル・ 第3回 杏林CCRCフォーラムを開催

平成27年2月21日（土）、八王子市学園都市センター 12階で、平成26年度「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」第2回杏林CCRCラウンドテーブル・第3回杏林CCRCフォーラムが開催された。連携市からは3市長含め計23名の関係者が出席した。杏林大学からは副理事長、学長、副学長含め計34名が出席した。

第一部のラウンドテーブルでは、連携3市長と本学事業責任者の間で26年度COC事業の報告と意見交換が行われた。

はじめに古本氏から、本学COC事業の進展状況と、26年度の教育面での取り組みが報告された。次に蒲生氏から、CCRC研究所における平成26年度の研究活動「大学が持つ知の公表」「大学と地域の知の統合」「大学の知の創造」の三視点の報告があった。続いて古本氏から、26年度COC事業による社会貢献活動について報告が行われた。

最後に跡見学長から、大学で地域について学ぶことの意義と、27年度の杏林CCRCフォーラムを羽村市で開催する意向について説明がなされた。

フォーラムでは、はじめに跡見学長から開催挨拶と、大学で地域について学ぶ意義が述べられた。八王子・羽村・三鷹を学ぶことは、日本各地に存在する地域的課題や行政のあり方について学ぶことでもある。そして自らの地域を学ぶことにより、地域からグローバルへ展開していくという視点が重要であるとした。

続いて古本地域交流推進室長から、教育面での26年度実績報告、次に蒲生CCRC研究所長から、研究面での26年度実績報告がそれぞれ行われた。最後に地域交流推進副室長の石井博之氏から、26年度COC事業での社会貢献活動について実績報告が行われた。

以上の報告の後、連携自治体の八王子・石森孝志市長、羽村・並木心市長、三鷹・清原慶子市長のそれぞれから、



ラウンドテーブルでの意見交換の様子

本学COC事業に対する期待と要望の言葉が寄せられた。最後に、本学の松田剛明副理事長から閉会の挨拶が述べられた。

第二部のラウンドテーブルでは、連携3市の自治体関係者・各団体関係者と本学の実務担当者間で、本学COC事業の活動について意見交換が行われた。

はじめに、26年度に本学が実施した個別の社会貢献活動の担当者4名から報告が行われた。保健学部の子田晋治氏からは、応急救護や防災・減災に関する市民講習会の取り組みについて、同・芝原美由紀氏からは、ボッチャ等の障害者スポーツ活動について、同・太田ひろみ氏からは、多胎育児支援の取り組みについて、総合政策学部の進邦徹夫氏からは、羽村市での商店会活性化の取り組みについて、それぞれ報告された。以上の報告に続いて、八王子市、羽村市、三鷹市の行政・各団体関係者から、本学の取り組みについての意見と要望が述べられた。様々な視点から本学の活動に対する評価が寄せられ、今後取り組むべき課題についての問題意識の共有が進められるとともに、新たな協力の可能性について様々な発見が得られたラウンドテーブルであった。



八王子市・石森孝志市長



羽村市・並木心市長



三鷹市・清原慶子市長

「地域志向活動、どのように取り組むか？」 COC関連FD/SDワークショップを開催

平成26年10月29日（水）に「地域志向活動、どのように取り組むか？」と題したワークショップを実施した。

このワークショップは、COC事業の一環として、「地（知）の拠点整備事業」の現状報告ならびに今後の新たな取り組みへのきっかけづくりとその課題について学内での情報共有を目的に、杏林CCRC拠点推進委員会と中期計画FD/SD実行部会の共催（協力：外国語学部FD委員会）で企画されたものである。

会場となった八王子キャンパスF棟452教室には日が暮れかけた16時30分に3学部の教職員84名が集まった。

はじめに、地域交流推進室長である古本泰之外国語学部准教授から平成25年9月に文部科学省のCOC事業に採択されてからこれまでの経緯を含めた挨拶があった後、進邦徹夫総合政策学部教授が今回のワークショップの進め方について説明した。

参加者は6～7人ずつ13のグループに分かれ、まずは「うそつき自己紹介」でアイスブレイキングをしてから、KPT法で各グループの意見集約をしていった。約30分間、模造紙上にK（現在行われているもので継続していきたいこと）P（改善が必要なことや問題点と考えられること）T（新たに取り組みたいこと）に分けて正方形の付箋を貼り付けていく作業を行った。その間、各グループを回るファシリテーター役の教職員から適宜アドバイスを受け、グループで出された意見をまとめていった。最後の30分間は各グループ2分の発表によって全体を共有する密度の濃い時間となった。

地域交流をさらに促進していくためには、地域のニーズの把握、そのメリットの可視化、市民への広報、学内での情報共有とシステムづくりによる制度上の問題や人員と時間の問題解決などが必要であることを多くの教職員が感じていた。さらに、井の頭キャンパスへの移転を視野に食堂等施設の地域住民への開放、3学部のリソースを生かした公開講座の拡大、学生が中心となる子ども対象の杏林塾づくり、コミュニティFM局の開設など、教職員がさまざまなアイデアをもっていることも分かった。

最後に、「うそつき自己紹介」から終了まで参加して下さったポール・スノードン副学長からお言葉をいただいた。井の頭キャンパスに移転すると住民との物理的な距離が八王子よりぐっと近くなることもあり、子どもと高齢者ばかりでなく新たな学びの意欲をもった地域住民のための本当の「市民大学」が求められていると力説された。



各グループによる発表の様子

杏林大学 地（知）の拠点整備事業 平成25年度事業に係る第三者評価報告書

I. 第三者評価委員会の開催概要

1. 日時 平成26年9月5日（金）15時～17時
2. 場所 杏林大学三鷹キャンパス本部棟11階 貴賓室
3. 第三者評価委員（敬称略）
井藤 英喜

（地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター長）
関谷 博（羽村市子ども子育て会議副会長）
中村 秀一
（一般社団法人医療介護福祉政策研究フォーラム理事長）
（国際医療福祉大学大学院 教授）

Ⅱ．第三者評価報告書

1．総括的評価

平成25年度の実施期間は非常に短期間ではあったが、極めて迅速に様々な取り組みを実施したことが高く評価できる。学長のリーダーシップのもと、CCRC研究所、地域交流推進室等、事業推進の中核を担う教職員の方々は良く努力された。しかしながら、実施期間の短いことから、十分な事業成果を確認するに至らなかった取り組みも見受けられた。第三者評価委員会は、杏林大学が平成25年度に実施した取り組み全体を点検・評価をするとともに、平成25年度に実施した事業を十分に活用しつつ、平成26年度以降「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」として大きな成果をあげられるよう以下の助言を行う。

2．項目別評価・助言

(1) [全体]：事業の推進体制・賦活活動

非常に短期間のうちに様々な取組を実施され、大変努力をされ高く評価できる。しかしながら肝心の受け手（地域）側と学内の一部とが、点と点で繋がっている印象なので、学部や大学が全体として取り組んでいるということが見える体制を明確に整理しておく必要がある。更に、実施した事業についての評価がないと事業ばかりが増え、教員の負担となる、あるいは教員個人の活動となってしまう懸念がある。

但し、効果の判定・評価システムを作り継続の必要性を毎年判断するとなると負担も大きい。そこで、本当に、杏林大学が柱にしたい事業を学長、CCRC研究所からの提案という形で示す方法もあるだろう。また、個々の教員がやりたいと考えている事業を、学内の協議により修正を加えつつ、発展展開させることも必要であろう。本格的にはこれからではあるが、5ヵ年のタイムスケジュールを組み立て、2年目になる今年度から本格的な実施、3年目からは自発的な活動ができれば理想的である。

キャンパスの存在しない羽村市が包括連携協定に基づき、数多くの事業が展開されていることは、今後の大学と地域交流の在り方として全国の実例になるかと思われる。多くの羽村市民が杏林大学との活動を知るためにもメディアを活用し、行政と大学で協力して行う活動を紹介していくことが引き続き望まれる。

(2) [教育]：教育の地域志向化

行政や社協からの発信ではなく、大学から情報発信を強化し、課題を見つけ、高齢者の方が培ってきた知識と経験を基に大学でお話をいただくなどの機会を設けてみるのも一つの案である。様々な能力を持った方たちが自分の強みを生かせるようなマッチングを時間と空間を共有する中で関係の構築をしていくのも良いのではないか。アウトリーチを行う地域包括ケアセンターが全国で4000ほど存在しているので市役所の紹介でラウンドテーブルを行うのが肝要である。拠点として人の集まる場所をつくり、外部から

の人が行き来できるようになれば軌道に乗ると思う。

NPOや住民活動が成功していく例には、活動の拠点があり、地域・大学間コーディネーターが活かされ、多少の金銭的余裕があることを念頭に入れ、大学と地域がともに協力して活動していくなかから、地域の力を出してもらい、地域にも依頼するし、地域にもやってもらうことが賢明であろう。

(3) [研究]：地域を志向した研究体制

近い将来、高齢者が増えるのは東京、埼玉、千葉などの都市部と言われている。高齢化がすでに進んでいる地方についてはこれ以上の増加はなく、高齢化対策が都市の問題、東京問題、首都圏問題となっている。今までの政府の高齢化は地方の問題に限定されており、老人ホームの建てやすさや人件費の安い場所での対策を行っていたが、都市部での高齢化となると人件費は高く、土地もなく、意識・知的レベルの高い中でどのような高齢社会を築いていくかが課題であるため、貴学のような医学部、医療系の大学が行う取り組みとしてはとてもふさわしい。社会的にも今後はNPO団体や住民の組織で社会参加を促し、高齢者の自立度を高めてほしいという要望があることから、貴学の取り組みに期待をするところである。

呼びかけをして外に出てこられるのは元気な高齢者であるが、元気な高齢者はあまり問題を持っておられない。問題はひきこもりつつある方の対応である。田舎の煩わしさから逃れ、都市部に移り住んでいるのが、都市型高齢社会である。高齢者にとって何が望まれるのか。密着する関係を好まない、一定の距離感をもった中での支援が求められている。

(4) [社会貢献]：杏林CCRCに即した社会貢献活動

様々な社会貢献活動をトップダウンで行ってしまうと学生は興味を失いかねない。現場を経験させ、課題を与えて地域の受け口を準備してもらい、学生自らの興味から活動を行い、人材を育てていくのもひとつの取り組みとして必要であろう。地域の方が熱心で地域の中でも学生に話したいという意欲を持っている高齢者も多いと思うので、地域の方々に臨時教員をお願いできるようなシステムがあってもよいのではないか。取り組み事業の一つである生きがいづくりコーディネーター養成で、このような人材も育成していったほしい。

今後高齢者が高齢者を支える仕組みに移行する時期でもあるため、健康な高齢者が社会貢献活動を行うにあたって何が不足しているのかを検証していただきたい。元気な高齢者が介護を必要とする方を支えていく形や、生きがいの押し付けがましくない支援を心得てボランティアを行っていく教育システムを構築していただけることを期待したい。

出張報告

海外学術調査報告

米国カリフォルニア州の日系米人及び在米邦人社会の高齢者施設調査

■日 程：平成27年2月8日（日）～15日（日）
■訪問者：蒲生 忍（杏林CCRC研究所）

目 的

「地（知）の拠点整備事業」の一環として、われわれは昨年度、米国Seattle市、Phoenix市、San Francisco市の調査で多くの高齢者施設を見学、米国のCCRCが単なる高齢者の集合施設ではなく、宗教や職業、また人種的なコミュニティ基盤が潜在する施設である場合が多いことを見出した。これは今後の日本での高齢社会においても非常に示唆に富むと考える。特にSan Francisco市の日系人施設はその歴史的、文化的背景や、現在の少子化、グローバル化の状況から、主に白人を対象とする他市の状況と比較して、非常に興味深いと考えた。しかしながら、日系人施設の訪問調査は日程の都合上、極めて不十分なものとなり、より詳細な情報を得たいと今回下記の日程でSan Francisco市の高齢者施設の調査を行った。

出張日程

2月8日（日）	成田国際空港発 San Francisco International Airport着
2月9日（月）	San Francisco市 浄土真宗東本願寺派 San Francisco Buddhist Church、気持会Kimochi-Kai、気持ホームKimochi Home訪問
2月10日（火）	San Jose市 浄土真宗東本願寺派 San Jose Buddhist Church Betsuin、友愛会Yu-Ai Kai訪問 San Francisco市 介護付有料ホーム The Carlisle 訪問
2月11日（水）	Angel Island のImmigration Station 旧移民局見学
2月12日（木）	San Francisco市 介護付有料老人ホームKokoro、米国型CCRCのThe Sequoia 訪問
2月13日（金）	San Francisco市 JCCCNC、Japan Center、Asian Art Museum訪問
2月14日（土）	San Francisco International Airport発 機中泊
2月15日（日）	成田国際空港着

出張内容

前年の米国3市での高齢者施設の調査をさらに深め、詳細なデータの収集・分析を加えるため、本年は米国San Francisco市のJapantownを中心に訪問調査した。
以下が今回の主な訪問施設の概要である。

①San Francisco Buddhist Church（SFBC）

Japantownにある浄土真宗東本願寺派に属するSFBCにて、住職の日系三世Rev. RKと、訪問の目的について意見交換を行った。Rev. RKからは「日系人の世代進行により日系意識の希薄化は否定できないこと」「仏教寺院も日系社会の集会所から米国仏教の場への変化を経ていること」「現在米国でも仏教の関心は高まり日曜の集会も英語であり参加者の半数が白人であること」「日本の本願寺派の規範に厳密に従うことが困難であること」、さらに「米国での禅の普及に伴い真宗でもMeditation瞑想が取り入れられていること」などについてご教示いただいた。

②San Jose Buddhist Church

San Jose市にある浄土真宗東本願寺派の別院の格式を持つSan Jose Buddhist Churchでは、輪番Rev. KFと意見交換。「白人系の信者の増加が著しいこと」「San Joseの日本人はシリコンバレー在勤者を中心に増加しているが、仏教寺院や従来の日系社会との接点が少ないこと」などの情報提供をいただく。また、「従来、仏教寺院が仏事のみならず地域活動の場、青少年スポーツの場としても活用されていたが、門徒の高齢化に伴い、現在は必ずしも活発ではないこと」などの説明を受けた。

③気持会 Kimochi Kai

気持会Kimochi Kaiは、San Francisco市のJapantownに在住する、高齢期をむかえた日系一世二世の援助のために、日系三世により1971年に創設されたNPOである。日系三世である同会のExecutive Director Mr. SNからは、「日系社会及びJapantownの現在の状況」について概説いただいた。また同会で運営している、独自の高齢者ホームKimochi Homeでの二世・在米邦人の利用状況について説明を受けた。

④Kokoro

Japantown内にはもう一つの高齢者ホームがあり、Kimochi Homeと同様に、二世・在米邦人が日本の文化と習慣の中で老後を過ごせるように開設されたのが、介護付賃貸型有料老人ホームKokoroである。同施設では、Sales Marketing DirectorのMr. JMの案内で施

- ③**神戸市看護大学**
ベッドタウンであることによる急速な高齢化が問題となっており、それに対する地域貢献を掲げていることで
本学の活動に通じることが多く、参考になった。

■ 成 果

地域との全学的な連携を進めるうえでの学内組織のあり方や全教職員の地域志向化に向けた意識改革の手法など、
本学の事業取り組みについて大いに学ぶところがあり、全
学FD・SDワークショップ（平成26年10月29日実施）につ
ながった。また、地域志向の教育を行う上で、地域で学ぶ
ことが学生の成長にどのようにつながっているのかを測る
指標の必要性についても意見交換を行い、平成27年度以降
の教育改善の参考となった。

- 育研究が進められていると感じた。
③**京都大学**
教員数も莫大なことに加えて様々な教員がおり、訪問
校共通して「全学的」な取り組みの難しさを感じた。

〈石井班〉

- ①**和歌山信愛女子短期大学**
大学の校舎とその自然環境を開放することで、地域で
の子育て支援を行っており、そのための開放の場をしっ
かりと作り上げていることが印象的だった。

- ②**大阪市立大学**
社会貢献と研究と教育を一体化させていくシステムが
うまく作られており、地域での学習を発展させるように
教育カリキュラムが段階的に構成されていた。

出張報告 国内②

「地（知）の拠点整備事業シンポジウム」に参加

- 日 程：平成27年 2 月26日（木）～28日（土）
■訪問者：古本 泰之（地域交流推進室長、外国語学部 准教授）
氏江 規雄（八王子事務部 教務課 課長）
青柳 優子（八王子事務部 地域交流課 係長）

■ 目 的

他大学の地域社会志向教育への取り組みやCOCを取り
巻く最新の状況、また、COCの今後の展開や可能性など
について理解を深め、本学でのCOC事業の発展に寄与す
る。

■ 出張日程

2月26日（木） 高知県立大学
2月27日（金）、28日（土）
「地（知）の拠点整備事業シンポジウム～COC全国ネット
ワーク化事業～」（高知大学主催／高知県民文化ホール）

■ 出張内容

平成27年 2 月26日～28日、高知県立大学への訪問並びに
「地（知）の拠点整備事業シンポジウム～COC全国ネット
ワーク化事業～」への参加のため、出張した。以下、そ
れぞれの概要である。

- ①**高知県立大学**
地域教育研究センターの川崎伸氏、河野淑子氏より、
「地域社会志向教育」の取り組みや、県民開放授業・公開講
座・履修証明プログラム「土佐学プログラム」等について
説明いただいた。
「土佐学プログラム」については、「課題先進県」から

- が継続したのは衆知の如くであるが、中国系移民の子孫
による強い働きかけで1964年にカリフォルニア州の歴史
的建造物に、そして現在は合衆国国定歴史建造物に指定
され、2009年から一般公開されている。

また、今回の調査でも日程の都合や先方の体調不良で訪
問がかなわなかった施設、キリスト教関係施設、また今回
情報を頂戴したBerkeleyのJ-Sei Community等があり、
可能であれば今一度の機会を持ちたい。

■ 成 果

今回、米国San Francisco市のJapantownと周辺の高
齢者施設を見学しその施設関係者と居住者の話を聞く機会
を得た。多民族が共存する米国の中で、日系社会が老人施
設を立ち上げ、維持している事は、白人社会以外では極め
て特異な事で、日系の「敬老」という伝統的価値観の発露
であったと考える。存亡の危機にあるとはいえ、日系施設
の中で多くの若い日本人が参加し重要な役割を担っている
のを見るのは、頼もしくまた希望を繋ぐ思いであった。ま
たお話を聞く機会を持った日系、在米邦人の高齢のご婦人
達には激動の時代を賢明かつ強靱に過ごされたある種の威
厳がありその人生の重さに心打たれるものがあった。

- 9月10日（水） ③京都大学
〈石井班〉
9月8日（月） ①和歌山信愛女子短期大学
9月9日（火） ②大阪市立大学
9月10日（水） ③神戸市看護大学

■ 出張内容

平成26年 9 月 8 日～10日、地域交流推進室長・古本泰之
ほか 5 名が、2 チームに分かれ、近畿地方のCOC事業採択
校を訪問し、活動内容等について調査を行った。以下、訪
問校のレポートである。

- 〈古本班〉
①**奈良県立大学**
全教員がいずれかのコモンズに属し、コモンズ同士、
互いの競争心を煽りながら活動を遂行していく点は、発
展的かつ非常に良い取り組みであると感じた。
②**兵庫県立大学**
COC事業採択に伴って採用された 3 名の特任助教が一
人 2 プロジェクトを担当しており、安定した基盤での教

- 設見学。提供するケアや現在の経営状態、今後の見通し
などについて情報提供を受けることができた。

- ⑤**友愛会Yu-Ai Kai**
San Jose 市は日系の移住の歴史は古く、現在は近傍
のシリコンバレーへの日本企業の進出もあり、その
JapantownはSan Franciscoとは異なる様相を呈する。
友愛会Yu-Ai Kaiは、日系社会での高齢者施設としてデ
イケアや昼食の提供などを行っている。三世であるSH
氏から、同会の活動状況について説明を受けた。

- ⑥**The Carlisle／The Sequoias**
日本では介護付有料ホームに当たるThe Carlisle で
は、在米邦人Mrs. YGを訪問し、居住者の視点から施設
についての意見や居住に至った経緯などを伺った。
また、同氏より、隣接する老人ホームThe Sequoias
に居住する在米邦人Dr. KDを紹介いただき、現在の日
系社会・在米邦人社会の問題点や、日本と米国の高齢者
介護制度と施設の違いなどについて積極的に意見交換を
行う。

- ⑦**Angel Island**
1910年から40年までの間、日系移住者を含めアジアから
の移民が米国に最初の一步を記した移民局Immigration
Stationが置かれたAngel Islandを訪問。移民後も差別

出張報告 国内①

近畿地方のCOC事業採択校を訪問調査

- 日 程：平成26年 9 月 8 日（月）～10日（水）
■訪問者：〈古本班〉
古本 泰之（地域交流推進室長、外国語学部 准教授）
進邦 徹夫（総合政策学部 教授）
青柳 優子（八王子事務部 地域交流課 係長）
〈石井班〉
石井 博之（地域交流推進副室長、保健学部 准教授）
太田ひろみ（保健学部 教授）
依田 千春（八王子事務部 地域交流課 課長）

■ 目 的

近畿地方のCOC事業採択校を訪問し、これまでの地域志
向教育・研究・社会貢献活動の内容や教育効果の測定方法
をはじめ、地域との連携方法、学内での運用体制の在り方、
本補助事業採択に伴う新たな動きを中心に、ヒアリング調
査および意見交換を行った。

■ 出張日程

- 〈古本班〉
9月8日（月） ①奈良県立大学
9月9日（火） ②兵庫県立大学

